

- H. Schurtz : Grundriss einer Entstehungsgeschichte des Geldes, 1898.
 G. Thilenius : Primitives Geld. Archiv für Anthropologie, 1920.
 M. Schmidt : Grundriss der ethnologischen Volkswirtschaftslehre, 2. Bd., 1921.
 五、貨幣の法的性質に就て
 Savigny : Obligationenrecht, 1861, I. Bd.
 Ravit : Beiträge zur Lehre vom Geld, 1862.
 G. Hartmann : Über den rechtlichen Begriff des Geldes und den Inhalt der Geldschulden, 1868.
 E. Seidler : Die Schwankungen des Geldwertes und die juristische Lehre von dem Inhalt der Geldschulden, Conrads Jahrbücher, 1894, S. 685 ff.
 R. Hildebrand : Über das Wesen des Geldes, 1914.
 M. Wolff : Das Geld : Handbuch des gesamten Handelsrechts, Bd. 4, 1. Abt., 1917.
 K. Helfferich : Das Geld, 2. Abschnitt : Das Geld in der Rechtsordnung. 3. Aufl., 1916.
 G. F. Knapp : Staatliche Theorie des Geldes, die ja vor allem eine Rechtstheorie des Geldes ist.
 Julius Lehmann : Die Geldentwertung als Gesetzgebungsproblem des Privatrechts, 1922.

第三編 貨幣及價格論

第七章 商品價值學說

第一節 價格と價格形態

如何に人々が貨幣の本質に關する疑問に解答を與へようとも、假令貨幣を商品なりと名付けようとも、又假令商品に對するその對立を強調し且つそれに他の價值形態を與へようとも、又假令價值一般の概念を貨幣に適用し得ると信じないとしても、常に貨幣學說の理論的並に實際的に極めて重要な方面は貨幣と價格との間の關係に關する問題である。就中貨幣數量と價格程度間の關係に對する問題である。従つてそは數量的なる貨幣問題である。まことに此の問題に當面して、あらゆる貨幣觀は神の試練にたとへなければならぬ。茲ではその内容の豊富が明かでないならぬであらう。

極めて一般的なる國民經濟的意義に於ける價格と云ふ言葉は一定の給付と交

換して與へられるところの反對給付を意味して居る。即ち貨幣經濟の圈内に於ては商品に對して支拂はれたる價值單位を支持する貨幣額であるが、尤もその商品は財貨、有價證券、人的勞働給付、或は他の購買物であることができるであらう。價格理論は依つて以て貨幣とそれに代へて購買されるところのもの、即ち商品との間の交換が果される法則の學である。

交易の初めに於てこの交換は經濟上の考慮に基いて行はれ又は經濟原理に隨つて行はれるよりも、寧ろ慣習と傳統又は屢々單に官權的な制度に從つて行はれる。斯くの如くである限りに於ては價格は純粹の經濟理論的考察には這入らない。純粹經濟理論的考察は價格構成が自由意思に依る合意に基づき、又は經濟主體の嚴密なる經濟的考慮に基いて行はれる場合に初めて効果のある研究分野を見出すのである。經濟のより高い段階に於ては、もとより更に經濟外的の或ひは協同經濟的の決定原因が價格構成に這入り込むのである。其處には獨占價格、組合價格及び國家的に制限されたる價格(最高價格決定並に正當價格決定等)が成立する。經濟行爲の根本的衝動たる最小手段に依る最大効果の追求は促進せしめ

られるが、この場合社會政策的或は權力政治の理由に依り或る程度まで壓せられる。もとより價格構成はその場合に於ても又全く個人經濟的の利害關係から自由であるを得ないであらう。なんとなれば誤れる價格約束は交易を窒息せしめ交易を不正手段に訴へしめるに至るであらうから。

従つて價格の根本形態は經濟主體の自由競争に於ける自由意思に依る合意に基づく處の又は經濟主義の原理に從つて生ずるところの價格である。

第二節 價格變動の外的決定原因(需要供給の原則)

價格の根本形態に關しては先づ貨幣と同じ商品の性質より全く抽象され、従つて財貨市場、勞働市場、有價證券市場、爲替取引所等、總じて市場領域に適用される原則を提出することが出来る。この原則は従つて又爲替相場市場に於ける如く貨幣と商品が國境を越へてその働きを交換する場合にも妥當する。その原始的な命題の解く處に依れば、總ての價格は供給と需要とに依つて決定される。人々は供給と需要との範圍をその必要度(Dringlichkeit)より分つことに依つてその命題

をより正確に方式化せんと試みた。とは云へ元來この區別に依つて意味する處は價格は給付の量、即ち商品量に關する取引當事者双方の協合からばかりでなく反對給付の量、即ち貨幣額に關する取引當事者双方の協合より生ずると云ふことに過ぎない。なんとなれば供給と需要との範圍は商品量に關する交換可能を表現するに對して、その必要度は貨幣額に關する交換可能を意味するに外ならぬからである。従つて吾々は需要の必要度と云ふ代りに價格承認性 (Preiswilligkeit) 又は支出可能性 (Ausgabemöglichkeit) と云ふ言葉を用ふことができ、又供給の必要度と云ふ代りに精算欲望又は貨幣需要と云ふ言葉を使ふことができる。ジェームス・スチアートはこの意味に於て、大きい需要と高い需要、小さい需要と低い需要とを區別する。従て供給と需要の一般的原则は商品並に貨幣に關する數量的限定が賣買行爲の基礎となつて居り、従つて價格は欲求される商品數量と提供される貨幣額とに比例して變動し、又提供される商品數量と欲求される貨幣額とに反比例して變動すると云ふ認識以上に出でぬ。

ボエーム・バアベルク (Böhm-Bawerk) (奧太利) が供給と需要との命題に與へ、従つて多くのドイツ並に奧太利の教科書に移されたところの定義も亦、この認識の進化を意味するものではない。人も知る如く彼は次の價格決定理由を數へ上げて居る。

- 一、商品に向けられたる要求の數(需要の範圍)、
 - 二、購買者側に於ける評價數字の高さ(需要の強度)
 - a. 購買者に依る需要の主觀的價值評價、
 - b. 購買者に依る貨幣 (Preisgutes) の主觀的價值評價、
 - 三、商品が販賣される數(供給の範圍)
 - 四、販賣者側に於ける評價數字の高さ(供給の強度)、
- それは更に次のものに依存する。
- a. 販賣者に依る商品の主觀的價值評價、
 - b. 販賣者に依る貨幣 (Preisgutes) の主觀的價值評價、

此處に企てられたる如き必要度の分析は主觀的貨幣價值並に主觀的商品價值

の概念の利用に依つて、一つの既知量の説明に二つの未知量の導入を意味する、従つて二つの未知量を有する解けざる一つの方程式を提出することを意味する。かくてそれは經濟理論的立場から區分することを企つべき目的を有つことなくして單に四つの數量的の限界を論じて居るに過ぎないのである。併しながら四つの數量要素を考慮するのであつて二つの數量要素を考慮するのではない、と云ふことを指摘するのはさほど重要ではない。蓋し供給には二重物、即ち貨幣欲求と商品の提供準備が存在し、又需要に於ても、即ち貨幣欲求と貨幣の提供準備が含まれて居ると云ふことが屢々看過されて居るからである。

いまこの數量限界を確立せんとするならば、取引の完全なる自由があり且つ經濟主義の原則が完全に作用する場合に生ずる價格が直ちに明かとなるであらう。買手が賣手に對立すると價格は勿論一方が最も尠く支拂はんとし、他方が最も多く要求せんとする貨幣額の間に存する點に價格は確立するであらう。この場合この額は常にある程度まで交換當事者双方に知られたる最終の價格に依つて支配される。買手複數であり賣手一人のみであるならば賣手は事情を充分に知

つて居るならば、最も多くの貨幣額を提供せる者に商品を讓渡するであらう。複數の買手と複數の商品所有者とが對立し、そして双方に於て貨幣と商品に對し種々なる數量的限定が存在する場合には、而かも單一價格が中どころに於て成立し、その價格は實に與へられたる限界決定の圈内に於て取引の最高量が達成される價格である。この場合價格が云はゞ科學的な方法でこの原理に依つて決定される市場は、仲買人に依つて相場を建てられる有價證券取引所である。それはなるべく多くの賣買注文が果され得る如き價格を見出すところの觀點の下に於て行はれる。(註五五)

科學は勿論この需要と供給の一般的原則では満足することは出来ない。とは云へ科學は深く立入つて研究する場合に於て、もはや貨幣形態及商品形態より抽象化することはできない。そこでこの問題を先づ更に二つの問題に分つ。即ち商品價格相互の關係に對する問題及び貨幣並に商品間の一般的交換關係に對する問題とである。従つて一方に於ては價格關係の問題及び他方に於ては價格程度の問題を研究しなければならぬ。まづ第一に吾々は價格關係 (Preisrelation) 而

も財貨價格の關係を考察せんとする。

(註五) Salinger's Börsenpapier. I. Teil; Die Börse und die Börsengeschäfte, 1920, S. 236 ff.

第三節 生産費説と労働價值説

財貨價格相互の比例は如何にして説明されるか、例へば鐵は木材よりも高く又肉は穀物よりも高いと云ふ事は如何にして生ずるか、との問題は古くより解答されたるところに依るとその比例は財貨調達に供せられる犠牲と費用の量の異なることに基づくことと云ふのであつた。この觀念は既に一つの商品の價格を値切る人の議論として自から生ずる。又この觀念は價格の決定根據に關する最初の科學的熟慮にも基礎を置いて居る。又常にこの觀念はスコラ哲學者 (Albertus Magnus, Thomas von Aquin) の如き公正なる價格 (justum pretium) の教義の中にも含まれて居る。

この觀念は古典學派の經濟學者に於て嚴密なる形態の理論に引き上げられて居る。アダム・スミスは『如何なる部分より財貨は構成されるか』と云ふこと、即ち價格は勞賃、資本利潤並に地代の三つの費用要素に分解されることを示し且つ價格はこれ等の三要素の高さに伴つて變動することを證明せんと試みて居る。しかもスミスはこの價格は先づ市場に於て需要供給に依つて決定されると云ふことから出發したのである。いま若し市場價格が『自然的なる費用』(natürlichen Kosten) に依つて與へられたる額、即ち『自然價格』(natürlichen Preis) 以下に下落するならば、土地と労働と、資本とが當該生産部門より引上げられ、かくて貯藏の形成は減少し、そのために供給は減退し、それに依つて價格はその自然状態に復歸する。これに反して市場價格が自然價格以上に騰貴するならば、その結果それに對應する生産増加、貯藏形成の増進及供給の増加を齎らす。

これを要するにアダム・スミスは、需要を以つて貯藏形成はこれに適應するある所與のものとして看做す。彼れに依ればこの適應に依つて需要と供給とは永きに互つて見れば平均し、従つて價格は生産費に從つて安定する。貯藏の與へられて居る場合、需要形成に於ける變動は如何なる結果を生ずるか、と云ふことは彼れに依つて研究されては居ない。彼れは大體に於て労働と資本がその移轉の自由に於

て土地獨占又は自由競争の他の制限に妨げられることなくして生産に應じ容易に振り向けられ得ると云ふ意味に於て隨意に増加し得るところの工業生産物の大量を問題にして居たのである。

この前提の下に於ては價格は生産費に従ふ、即ち勞働及び原料に對する出費と資本利子と企業利潤を加へたるものに従ふ、と云ふ命題は正しい。併しながら——吾々は茲では利潤と地代の問題を除外する——寧ろ生産費は價格に従はないか、又生産費は主觀的評價に従はないかと云ふ反問を生ずる。この反問は主觀的價值學說の代表者に依つて提出された。併しそれは問題の變更、即ち價格關係の問題を經濟の動機並に分勞の根據に對する問題への移轉を意味する、即ち經濟に於ける需要形成は第一義的のものであると主張することが出來よう。或ひは需要形成を商品の主觀的價值評價に歸することも出來得るであらう。更に進んで需要形成に貯藏の形成を決定するとも推論し得る。併しながら貯藏形成を需要に適合せしめんが爲めには勞働のみを投ずるを要し、又容易に投ずることを得る限りに於て需要はなるほど勞働支出の量を決定するであらうが、しかし勞働支出は價格

關係を決定する。従つて客觀價值論は價格關係の問題に對して任意に増大し得る財貨を問題にする限りに於て妥當たり得るであらう。

直接に再生産し得ずして殊に農産物の價格の場合の如く、費用増加してのみ再生産し得る財貨の價格に於ける需要形成の影響を判斷するならば事情はまつたぐ異なる。かゝる場合に於て需要形成は費用増加の程度を決定し、従つてこの場合に於ては生産費は只だ外形的に決定を與へるに過ぎない。故にそれは嘗てリカルドーがその地代説に於て展開したる如き意味のものではない。

特にリカルドーはアダム・スミスの學說を、彼れがそれをより、正確に規定する限りに於て、この理論をより、充實した。彼れの體系は財貨の世界を三分することに基いて居る。それは今日もなほ行はれて居る如き三分法である。總じて生産を容易に擴張し、又は制限し得るところの工業生産物の大量は第一群に屬する。第二群には特に農産物が數へられて居る。それは制限したる量に於て増加困難の下に増加し得るものである。最後に第三の群は一般に再生産し得ない財貨、即ち古い藝術品、高貴な酒、骨董品等である。

既に觀た如く任意に増加し得る生産物のみが長きに亘つて見ると平均的生產費に一致する價格を得るに過ぎぬ。これに反してリカルドの説明せる如く制限的に増加し得る生産物の價格はその生産物の價格を充足するためには猶必要なる部分量——その生産には最高の費用を要するが——に於ける勞働と資本の消費に依つて決定される。限界生産以上に尠い資本と勞働の充當を要する如き生産物の價格は、もとより利潤及び賃銀を越へて特別なる報償の分け前、即ち地代を生ずる如き價格を得る。

併しながらリカルドの論證は尙補足することを要する。なんとすれば生産増加は如何なる程度まで勞働支出並に資本支出に依つて高められるかと云ふ點に關して決定するところのものは必要の形成であるからである。これに對して任意に増加し得る財貨の場合には、なるほど必要の形成が貯藏形成に對して決定的である。けれ共價格に對しては何等の意義を有たない。なんとすれば其の生産條件たる勞働は代替性を有する價格であるから。吾々は價格が代替し得る限りに於てより、注意深く云ふことが出来る。

リカルドは一般に再生産され得ざる財貨の價格を單に需要と供給のみに因つて決定せしめんとした。従つて彼れはこの場合進んで精密なる研究を抛棄して居るのである。もとより財貨の生産にして任意に増加し得ると得ないとに拘らず、自由競争より全く離れて居るために原價より眞に異つた價格を有し、従つてその價格は消費者が支拂能力を有する範圍内に於て彼れに提供し得る如きものであるところの獨占財產が、この群に屬するを得ないとしても、従つて又種々なる方面に於て獨占的なる價格構成の生じたる戰時經濟時代に尙ほ極めて接近して居なくとも、かゝる研究は骨折りに價へしなないであらう。客觀的價值學說はこの命題に對して一般に詳細に立ち入つて居ない。此處に於てか吾々はこの命題に關しては後に再論するであらう。

生産費說は價格を他の價格から説明する。なんとすれば賃銀、利子、企業家利潤及び地代はそれ自體給付に對し要求される貨幣額、即ち價格それ自體に外ならぬが故である。従つて生産費說は要するに種々なる價格、而も實に過去の價格と現在及將來の價格との間に存する重要な關係を説明するに過ぎない。若しこ

の學說が現在と將來との間の關係を力説するならば、それはケリー(Carey)の説明した如き再生産費説となり、事實に於て只だ生産費説の變形であるに過ぎない。併しながら生産費説は價格間の關係のみならず價格それ自體が説明さるべきである限り不十分である。其處で價格論を給付に對する報酬の上に基礎付けずして給付それ自體の上に基礎付けんとするのも故ある事である。この試みはカール・マルクスに於て最も其の顯著なる代表者を見出して労働價值説に至つて居る。カール・マルクスは財貨の効用は『富の素材的内容を構成する』と云ふ點より出發する。けれ共物理的科學的性質、そして一般に外部的現象形態に依存する効用性は交換關係、即ち交換價值、價格關係の根據ではない。かゝる諸關係はそれが公分母に還元され得る場合にのみ一般に有意義であり可能である。しかし自由なる交易を支配するこの唯一の公分母は財貨の中に對象化されたる人間の労働であつて、それは其の繼續時間に依つて計量^メられる。もとより尺度としては人間の労働力の何等かの支出が問題ではなく、寧ろ目的達成のために與へられたる組織的且つ技術的條件の下に於て必要なる労働が問題なのである。従つてマルクス

に依れば價格關係を構成するのは『社會的に必要なる労働時間』である。

カール・マルクスの論證はそれが價格と費用の並行して居る條件の明示、即ち財貨の任意増加性を看過して居る限りに於て、リカルドーに對する反動を意味すると云ふことは産業資本主義の偉大なる理論家に對する決定的な抗議ではない。なんとすれば大量の工業生産物に對しては吾々が利子問題を不問に附する限り費用學說の根本原理を深化する彼れの見解は依然として正しい。もとよりカール・マルクスは労働が價格關係を構成する如き社會的機構を越へて説明することを止めた。既にアダム・スミスは彼れが資本並に労働の自由移轉が行はれ貯藏形成が、たへず必要として表現される欲望の形成(Bedarfsgestaltung)に適合することを示す場合にかゝる社會的機構(gesellschaftlichen Mechanismus)を充分に明かにして居る。

近頃オツペンハイマアは、カール・マルクスを越へて、彼れが價格關係を各生産部門に於て同一の所得を獲得せんとする傾向に歸せしめんとすることに依つてアダム・スミスの古い學說と手を握つて居る。かくて彼れは最大收益率(Rentabilität)

のある場所を求むる勞働力をその動機に於て古典經濟學よりも幾分鋭く把握して居る。

第四節 限界效用學說

昔は價值に關する考慮は財貨の價格がその効用に屢々全く一致しないと云ふことに就いて驚異して居る。トーマス・ホン・アキノ (Thomas von Aquin) はこれに關して財貨の『品位』(Wirdo) と交換價值との間には對立が存在すると云ふことを既に指摘して居る。^(註五六) 例へば缺くべからざる鐵が、單に奢侈の目的に役立つに過ぎない金よりも遙かに安價である場合、世の秩序に於ける如何に滑稽なことであるかが感ぜられるであらう。長い間の現象は科學に於て、全く効用は價格評價の一般に前提であるが、しかし價格高は決して効用の程度と一致しないと云ふ假定に依るにあらざれば整頓することを得なかつた。かゝる見解は又古典學派の國民經濟學に依つても代表されて居る。

併し乍らその場合科學的考察が充分なるを得ず、従つて生産費說に對して財貨

はその費用に從つて評價されなくて、寧ろ評價が費用支出 (Kostenaufwand) を齎らすものであると云ふ抗議が生じた。併し乍らアダム・スミスの如く使用價值 (Gebrauchswert) —— 効用の意義に於て —— と交換價值 (Tauschwert) とを簡單に區別せずして寧ろ —— 恐らくシェーフレー以來(一八六二年) —— 單なる効用を使用價值に對立せしめ、しかして使用價值を効用と稀少性の綜合として理解する場合に初めて問題の根柢に到達することが出來たのである。

この綜合は獨特なる方法に依つて所謂限界效用學說に依つて形成されたのである。これに關しては己に二三のマーカントリズムの著述者に依つて、即ちチユルゴー (Turgot) に依つて又その他リカルドーに於て既に賛成されて居る。^(註五七) 本來の先驅者はトーマス (Thomas) 『交易理論』(Theorie des Verkehrs, 1841) とグッセン (Gossen)

『人間交易の法則の發展』(Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, 1854) の二人である。この考へは英國に於てはゼボンス (Jevons) スイスに於てはワルラ (Wallas) に依り、奧太利及獨逸に於てはカール・メンガー (Karl Menger) に依つて科學的に資格を獲た。又この見解は更に進んで奧太利等に於てウイザー (Wieser) ボエーム・バ

ウエルク (Böhm-Bawerk) 及 シュムペター (Schumpeter) に依り、又英國ではマーシャル (Marshall) シュエーデンに於てはヴィクセル (Wicksell) アメリカに於てはジュー・ビー・クラーク (J. B. Clark) 及アービン・フィッシャー (Irving Fisher) 佛蘭西に於てはジード (Gide) に依つて發展せしめられた。この根本思想は大體次の如きものである。(註五八)

効用と客觀的 (objektiv) 交換價值、即ち一つの價格となる可能性との間には、主觀的 (subjektiv) 使用價值が存在する。換言すれば「主體の福利目的の爲めに財貨又は複合財貨が有するところの意義」が存する(一六七頁)。この價值は財貨に依つて滿される欲望がより多く且つより重要となるに従ひ益々大となる。人間が財貨に與へるところの主觀的評價は彼れが左右する貯藏量が與へられて居る場合經濟的に獲られる最少効用に依つて量られる。この効用をゼボンスは marginal utility (限界効用) と名付け、グレンツェルは Grenznutzen (限界効用) と翻譯して居る。従つて財貨が與へ得るところの最大効用はその價值の尺度とならず、その種類の財が與へ得るところの平均効用も尺度とならずして、反對に最少効用が尺度となる。この効

用を齎らすにはその財貨又はそれと同じものが具體的なる經濟的事情に合理的に更に使用されなければならぬ。(一八四頁)

併しながら唯に勞働費用に依つて補ひ得べき財貨の價值が測定されるのは之と異なる。即ち財貨の生産の爲め必要な勞務に依つて測定される。然りと雖も其の價值は終局に於て事實効用に依つて評價されるものである。なんとなれば其處で利用すべき勞働時間が勞働費に依つて満足さるべき需要と比較して常に制限されるが故に、一財貨の生産に必要な勞働時間は常に欲望満足の他の可能性の損失を意味するものであるからである。従つて勞働費は効用の損失であつて、而も勞働支出はそれに依つて經濟的に獲られる最少効用に依り評價されるであらう。それ故に勞働支出に依つて直ちに補ひ得る財貨は吾々が合理的に更に勞働を費やす最少の價值の生産物と同様に評價されると云ふ推論を生ずる。

この思惟形式に従つて限界効用學説の多くの其他の考慮も完成される。かくてこの學説は一定量の生産財貨、第二級又はより高次の財貨より生産することを得る享樂財はこれ等の生産財貨の價值を、それ自身の効用を標準にして決定し、而

も實にこれ等享樂財貨の中、最少價值を有するものが生産財貨單位の評價に對して決定を與へるとの命題に到達する。それ故に生産財貨の價值は最終生産物の限界効用に依つて決定されると云ふことになる。

これに類似して財貨が購買に依つて補ひ得るならば、財貨の價值はそれがその財貨に負ふところの積極的の効用に從つて經濟主體に依り評價されなくて、それがその財産状態に依つても回復し得る如き、最少効用の財貨を標準とする價值に從つて評價されるとの觀念を生ずるのである。かくて結局常に財貨の限界効用が生産財貨の評價並に價格財貨に對して決定的であると考へられて居る。

從つて主觀的價值學説は一切の經濟行爲、就中一切の交換事象が繼續的なる効用比較より生じ且これに加ふるに經濟的欲望を満足するために唯々財貨と勞働力との限界されたる數量が提供されるに過ぎないと云ふことに基づくところの主觀的價值評價に依つて支配されると云ふことを瞭かにせんとする。即ち欲望の程度に應じてまた貯藏の程度並に分配及それを補ふ可能性に應じて價值が形成される。從つて前者の變化されることに應じて後者も亦變化する。

かくて限界効用説は恰恠に茲に存在する心理的錯綜をも發見したが、併し價格理論に明瞭なる且つ數字的に把握し得る根柢を與へることはできなかつた。價格は階段的効用からその尺度を得るとウイザー^(註五九)は書いて居る、同様にまた他の限界効用學説の代表者も云つて居る。併し乍らこの事を證明せんとすることは彼等にとつては失敗であつた。即ち彼等の反對者から正當に強調した如く主觀的價值評價は加算し得べき又乗算し得べき數字に轉化され得ないところの感情強度であるが故にその研究は坐礁せざるを得なかつた。

限界効用學説の説くところに依れば、粉一袋の價值は、十袋の總貯藏量の場合に九袋の貯藏の場合よりもより少である。併し乍ら、いかほどこの價值が少であるかに就ては限界効用學説は示すことを得ない。しかも限界効用學説は、例へば一着の上衣と一足の長靴との如く代置し得ないならば、二つの財貨の主觀的使用價值が如何に相互に關係するかを殆ど説明し得ない。なほ又例へば粉一袋と一着の冬上衣の如く、全く異なる使用目的に役立つ財貨に於ては、如何なる價值が存するかと云ふことは限界効用の概念を以つておそらく全く了解され得ない。

價格は數である、けれ共主觀的價值ではない。従つて夫故に購買行爲に於て數量的なる限定より出發する價格の一般命題にこの主觀價值を織り込むことは決して出來ない。故に主觀的價值論は純然たる擬制に基づくところの評價數字を以つて價格理論を取扱はざるを得ないことが明かである。其處で要するに價格理論にとつて限界効用説より吾々に残るところのものは、價格關係は自己觀察の方法に依つて効用に歸せられる主觀價值より生ずると云ふ信念のみである。故に敍上のことから——利害の調和から古典學派の樂觀論に近いところの——交換従つて生産、換言すれば利用し得べき勞働力の使用が構成されるのは、永きに亘つて見れば効用の最高量はそのが經濟的の權力分配の圈内に於て可能である限り、に於て成立する如くに行はれるとの信念を生ずる。

併し乍ら若し主觀的價值評價の概念が價格理論に移されるならば一つの證明し得ざる假定が存立するのみならず、限界効用説は、主觀價值はその價值の高さに於て屢々効用に依つて決定されるよりも寧ろ提供される犠牲の程度に依つて決定される事がより多いと云ふ非難を被らなければならぬ。況んや個々の場合に

於てひとり稀少性の要素のみが又はひとり珍奇(Rarität)のみが、またはひとり生産費用のみが何等かの欲望價值を有し、即ち所謂『貴重なる』又は有利に現はれ、そうして一般に吾々の多くの價值觀念は費用の觀念から支配されるよりも福利々得の觀念から支配されることが遙かに少ない、換言すれば屢々費用がまづ需要を呼び起し又は増加すると云ふ様な疑ひは決して存しない。

價值従つて價格を同時に効用と費用の概念上に基礎付けんとする試みはリーマンの理論である。彼れに従へば總ての經濟は快の感情(Justgefühl)並に不快の感情(Unjustgefühl)即ち効用と費用の比較に外ならない。あらゆる經濟行爲を爲すに當り費用以上に効用過多を得んとする努力が現はれる、従つて實に『彼れが各々の欲望種類になほ費やさんとする最終費用單位に依つて得るところの費用以上の效用過多は總ての欲望種類に於て大きさを等しくするのである』^(註六〇)。従てリーマンの價值論の根本思想は、總ての經濟的行爲は『限界收益の均衡』を達成せんとするこの努力に依つて決定されると云ふことである。もしかかる合法性が事實存するならば、しかしそれは價格觀察よりは論證し得ないであらう。なんと

ればリーフマンにとつて費用と効用とは純然たる心理的量であるからである。従つてそれは數學的に示され得ないところの量であるから、勢ひ茲にも亦證明し得ない假定が存在する。實に簡單なる心理學的演繹法が教へる事は通俗的な言葉に顯はせば、總ての人は寧ろ反對に殊に少し以前に比較的大なる利得が得られるならば出費に比較して少なる利得で容易に甘んじようとすることがあり或は逆な場合もある。

ところが正にリーフマンの所謂『心理的』經濟理論の説くところに依ると心理學的省察にたよらず従つて現實の數字で示される要素に歸せられない價格理論は有益たり得ない。或はより控へ目に云へば、即ち本書に於ては價格理論の課題は専ら次の四つの要因の協働より價格を説明せんとする點に求められて居る。

一、財貨貯藏量 (Gütervorrat)

二、財貨需要 (Güterbedarf)

三、貨幣貯藏量(財産力) (Geldvorrat) = (Vermögensmacht)

四、貨幣需要(貨幣支出、生産費) (Geldbedarf) = (Geldaufwand, Produktionskosten)

この要因の結合は經濟主體の意思決定を脱して居ると云ふことは、この場合強調するを要しないが、それは交換現象も亦場所的變化を意味することを指摘することが主觀價值説を幾分必要とした場合と同じである。いま從來支配的なる價格理論が如何に茲に再記されたる課題を取扱つたかを見るならば、客觀價值學説は價格、財貨貯藏量及貨幣需要(生産費)の間の關係を重く考へたが、これに反して主觀價值學説は主として價格、財貨貯藏量及財貨需要間の關係を研究するものと吾々は確言することが出来る。その場合主觀價值學説は、もとより限界効用の中に需要そのものに關する研究を遠ざけたる處の貯藏と需要の間の綜合を構成した。従つてこの價值説は、例へば財貨需要と貨幣貯藏との間に存する重大なる關係を全く看過せざるを得なかつた。財貨貯藏と貨幣貯藏(財産權)との間に存する關係は一般に殆んど全く價格關係の問題に依つて捕へられたる價格理論の圈内に於て説明されずして通常は吾々がいまや研究せんとする貨幣價值の高さ及決定理由の理論に於て説明されるのである。

(註五六) H. Ditzel: Theoretische Sozialökonomie, S. 207.

- (註五七) Zuckerkandl : Theorie des Preises, S. 44ff. Dietzel : a. a. O., S. 230.
- (註五八) Böhm-Bawerk : Positive Theorie des Kapitals, 1. Bd., 4. Aufl., ferner Artikel „Wert“ im H. d. St.
- (註五九) v. Wieser : Der natürliche Wert, S. 263.
- (註六〇) Liefmann : Geld und Gold, S. 29.

第八章 貨幣數量學說

第一節 はしがき

吾々が金屬論者と共に價格を解して內的貨幣價值に依り內的商品價值を除したる商と爲す場合に貨幣價值の高さに就て述べることを得る。従つて商品價值が高ければ高い程、又貨幣價值が低ければ低い程、それだけ價格が高いと云ふことは明らかである。吾々が己に知りたる如く價格 \parallel $\frac{\text{貨幣數量}}{\text{商品數量}}$ なる方程式は二つの未知數を含むが故に——一定の前提の下にのみ適用し得る労働價值學說を度外視するならば——貨幣價值の概念は價格變動に當り商品側に於ける諸特殊性を抽象するための手段であるに過ぎない。其處でかかる手段が利用されて價格なる概念の倒位を示す如き概念をも吾々は又全く缺ぐことができる。ある貨幣價值の下落と云ふ代りに吾々は價格騰貴と云ふことができる。そして反對にも云ふことができる。なんとなれば吾々は價格 \parallel $\frac{\text{貨幣數量}}{\text{商品數量}}$ なる方程式を一つの不變的な商品價值の擬制的假定なくしては利用する状態にないが故に價格程度と貨幣

價値の區別は結局に於て吾々がかくて同一の事實に於て二つの言ひ廻し方を得たる限りに於てのみ有効である。従つて貨幣價値の高さに於て云ふ場合は吾々はそれに依つて絶對的な價格程度に於けると同一のものを意味するのである。貨幣を商品として或は商品と同じと考へる金屬主義學說にとつては支拂は二つの財貨の交換即ち商品と貨幣との交換に外ならない。従つてそれ等の學說は貨幣價値の高さを商品價格と同様なる原則に従つて計らんと試みる。だからそれ等の學說にとつては結局に於て唯一の價値理論的課題が存するに過ぎない。即ち價格關係の問題であるが絶對的價格程度の問題ではない。かくの如く見るならば貨幣は唯だ經濟の大なる價格連鎖に於ける環に過ぎない。

吾々は貨幣商品説の二つの重要形態が存することを記憶する、即ち素材價値學說 (Stoffwertheorie) と職能價値學說 (Funktionswertheorie) これである。素材價値學說は使用價値、勞働價値或は生産費用を貨幣價値にとつて決定的であると考へ、職能價値學說は貯藏量と需要、換言すれば貨幣に對する供給と需要を貨幣價値にとつて決定的なるものと考へる。

使用價値學說は貨幣價値根據の説明にとつて魅力的ではあるが而もそれは貨幣價値の高度に就てより、詳細なる説明を爲すことは殆んど不可能であつた。使用價値學說はそれが貨幣を以て欲望に對し最も遠き順位にある財貨と解し、そしてこの財貨に貯藏と需要の原則を適用するならば限界効用學說の形態に於てのみ貨幣價値の高さに就てより、詳細に説明することを得るであらう。然る時は使用價値學說は職能價値學說と異なるものではなくなるであらう。併し乍ら限界効用論者はこの道を辿らず或は直ちに拋棄したのである。貨幣價値の高さに關する説明に於て遙かに成功したのは勞働價値學說であるが、併しそれは近代の貨幣制度にとつて應用し得ないのである。

第二節 貨幣價値の生産費學說と數量學說

貨幣價値の生産費學說はシニオールに依つてその古典的な形式を與へられた。シニオールの曰ふところに依れば、金と銀とは之等の金屬が一定の重量及品位の部分に區別され且一つの刻印に依つて證明されるや否やその性質の變化を被

むると云ふことを主張することを欲しないものは、それ等の價值にとつては同一の條件の下に於て生産されたる總ての他の財貨に對すると同じ法則が決定的でなければならぬと云ふことを認めなければならぬであらう。従つて貴金屬の價值にとつては生産費のみが標準となるであらう。いま一家族の勞働が一ヶ年中に金の沖積地より五〇オンスの金と同一の努力に依つて田畑の自由に成長したる生産物から五〇の^トの米を収益し得るならば、然る時は米と金の價值は同一であるだらう。従つて唯だ一の^トの米が金の一オンスと同價值を有するであらう。貴金屬の價值と生産費の關係は既知の思惟形式に依つて觀察される金に對する需要が例へば金の燭臺に對する急激なる需要に依つて金に對する需要が増加することになれば金の貯藏量が減少する。即ち一切の貨幣所得は尠くなり、また商品は廉價^{ヤスク}なり、金の生産は有利となる。その結果は多くの勞働がこれに振り向けられる、即ち金生産は増大し、貨幣量は増加し、商品價格は騰貴し、金の生産は再度不利益となり又低下すると云ふ結果になる。

かくて生産費は貨幣需要、従つて貨幣價值を統制するものである。實に生産費

貨幣

のみが統制するものである。其他の要因たる貨幣數量、流通速度、貨幣經濟の擴大、信用取引の發達などが、統制するものではない。なんとなれば貨幣は商品であると云ふのである。併し財貨の價值を流通速度又は信用に或は信用などより歸すると云ふことは一體何人が氣付いたのであらうか。もとよりシニオールはこの見解に反對して、更に貨幣を總ての他の財貨から區別して、しかもこれに依つてその効用性並に貨幣需要が貨幣價值に依存すると考へて居る。即ち貨幣價值が^トに減ずらば然る時は購買に當り正に二十倍だけの貨幣が必要であることになり、その場合シニオールは他の財貨に於ては、なる程需要が生産量を決定するけれども、貨幣に於ては需要は全く生産費に依存すると云ふことを推論して居る。

この場合シニオールは彼れが克服せんとした數量理論的觀察の明かに虜となつて居る。そこで彼れは貨幣と商品とは異なるものであると云ふことを認めねばならぬ。故に茲で貨幣價值の生産費學説は結局に於て數量學説の圈内に於てのみ正しいと云ふことが既に明らかになつて居る。その他の場合に於ては生産費學説自體は循環論^(註六一)に落入つて居るか、しからずば唯單に一つの價格は他の價格

より生ずると云ふに過ぎない。

現存する總括的財産力は如何なる原則に従つて個々の購買行爲に支配されるかと云ふことを問題にするならば——そのことは價格關係の問題である——生産費學説は、他に支拂はれた後に商品(Aktivwert)の爲に残されたる貨幣量が其の消費に適應する如くに貯藏の形成が行はれると云ふことを示す事に依つて一つのよい意味を與へる。然れども全商品のために支出されたる貨幣額の總體が如何程の量であるかを問題にするならば——それは絶對的價格程度或は貨幣價值の問題であるならば——生産費學説はこれに對して何等の解答を與へ得ないか或は貨幣に於ける貯藏形成は商品の貯藏形成に従ふ。換言すれば貨幣生産にとつての支出は購買されたる商品の生産と同一でなければならぬと云ふ事をいふに過ぎない。併しこのことは支持するを得ない。なんとすれば商品は又すでに以前に生産されたる金屬貨幣に依つて購買され貨幣は又他の商品と同様に消費されず、却つて繰返しくりかへし商品に對立するからである。貴金屬本位の場合に於て貴金屬の生産費と一般價格程度の間に於てはある一定の關係が存することは疑ひのな

いところである。併し、かかる關係は——近代の貨幣制度に於ては常に——生産費學説が教へるところよりも全く異なるものである。

(註六) St. ohn.

第三節 貨幣の職能價值學説

(本來的ならざる數量學説)

シニオール以前リカルドは既に生産費が貨幣數量以上に作用すると認めて居た。リカルドも亦貨幣を商品と觀た。従つて各の賣買を一つの商品對他の商品の交換と觀た。彼れも亦その場合に先づ貨幣と商品を同一視した。故に彼れは次の如く推論する、即ち需要と供給とは各個の商品の價值を決定し、従つてまた貨幣の價值をも決定する。實に生産費の高さは交換關係に對するより、深い決定基礎であるが、併しこれは直接でなく、従つて直ちに作用せず、却つて需要と供給との機構を越へて働くものである。即ち貨幣供給は貨幣量、言ひ換へれば貨幣貯藏量に依存する。故に吾々は貨幣に對する需要の變化せざる場合、貨幣價值は正

確に貨幣數量に應じて變化すると云ひ得られる。かくてリカルドは以上のことより商品價値の平均は貨幣量に並行して動搖すると云ふことを結論する。そこで彼れは需要及び供給の命題から數量學說に到達した。實に屢々需要と供給の命題を貨幣そのものに應用すると云ふことは數量學說の一形態として説明された。之に反して茲には事實決して貨幣の商品學說以外の何ものも問題ではなく、而も貨幣價値の高さに關する問題に應用されたる職能價値學說が問題である。これに對して貨幣需要と貨幣の供給とは決して一定され得ないと云ふことを指摘されるのは正當である。蓋し貨幣需要は常に無制限であり——ロツクのすでに認識して居たところであるが——そして貨幣供給は現存する貨幣量と一致しないからである。しかれども本來の缺陷はすでに需要供給の誤れる概念に存する。なんとなれば需要はリカルドに依つて明瞭に、需要は唯欲求としてのみ解されて居り、而して供給は提供(Bereitstellen、準備)としてのみ了解されて居る。併し之に反して既に上述せる如く二つの概念は兩面的である。需要は常に交易に於ても亦ある對價の同時的提供の下に於ける商品欲求を意味し、また同じく供給は一つ

の對價の欲求の場合に於ける商品の提供を意味する。貨幣經濟に於てはこの對價は貨幣である。故に貨幣に對する需要供給とはおそらく概念的に商品に對する需要供給より分離される、けれ共決して現實には分離されない。しかしリカルドは供給の場合に於ける『貨幣の提供と商品欲求』並に需要の場合に於ける『貨幣欲求と商品の提供』と云ふ一對の概念を引き離して居る。またこの一對の概念を再度『貨幣の提供と欲求』並に『商品の提供と欲求』と云ふ不自然にして非現實的な一對の概念に結合する。この一對の概念は唯々貸金市場に於てのみある意義を有するけれ共商品市場に於てはこの意味を有しない。故にリカルドの所謂數量學說は現實を概念より導き出さんと試みるところの煩瑣的思惟方法の學校流の一例である。

リカルドの貨幣價値論の根本誤謬はそれが外的交換價値、即ち價格に關聯する需要供給の概念を誤つて内的交換價値に應用して居ると云ふ點に特徴付けることが出來。

近代の職能價値學說はおそらく、かかる詭辯的の正しい感覺に於て貨幣に對す

る供給と需要 (Angebot u. Nachfrage) に依つて説明し難く、寧ろ貨幣供給と貨幣需要 (Geldversorgung u. Geldbedarf) に依つて説明するのである。^(註六三) 貨幣供給 (Geldversorgung) の観方に於ては近代の職能價值學説は貨幣貯藏量と貴金屬生産とを合せて考へる。また貨幣需要 (Geldbedarf) の観方に於ては近代の職能價值學説は貨幣市場の状態を説明するのである。之等の説明は貸金利息に關する認識に至るのみにして、併し價格、利息間の關係を犯すことなく價格構成への洞察に達するを得ないと云ふことを容易に看過して居る。^(註六四)

〔むしろ貨幣貯藏量と商品貯藏量との關係に依つて解される本來の數量學説はこの岐路に迷入することはない。本來の數量學説は貨幣を商品に對立せしめた。數量學説は貨幣を特殊なる商品種類として説明せず、寧ろそれへの對立物として説明する。すでに形式上その本來の數量學説はそれに依つて象徴主義、就中名目主義と密接に關係することを示して居る。名目主義は先づ貨幣の價值形態を商品の價值形態から區別するが數量學説は全く貨幣の數量を商品の數量に對立せしめて居る。〕

(註六一) Kap. 7, 2.

(註六三) Wagner : Sozialökonomische Theorie des Gelds und Geldwesens, S. 206ff. 然れども彼れは「この場合商品の購買及勞務給付に向けられる限りに於てのみ貨幣の供給が關係すると云ふことを正當に強調して居る。」

(註六四) Helfferich : Das Geld, 2. Aufl. S. 548.

〔彼は需要に就ても同様に説明して居る〕

第四節 象徴的數量學説

數量學説と云ふ言葉は屢々余の觀るところであるが最初にアドルフ・ワグナーに依つて其著ビールの銀行條例の貨幣説及信用説の中に現はれて居り、しかしてもとよりこの本ではリカルドの職能價值學説に應用されて居るのである。眞正なる數量學説は價格の定義より生ずると云ふことを殆んど人々は分析的判斷だと云ひ得る。吾々は即ち價格を一定の給付のために又より嚴密に云つて給付の量的單位のために與へられるところの(價值單位を指示する)貨幣額と定義するならばそれより同語反覆——價格は一商品に對して支出されたる貨幣數量に等しく、それと交換される商品量に依つて除されたる貨幣量に等しいとの命題を生ずる。云はゞ積分學に依つてこの方程式が擴大される。即ち吾々がある時期に

經濟領域の内部に於て支拂はれたる商品價格の總和を觀るならば、これがこの時期に商品市場に於て置き代へられたる貨幣額の總和と一致することは明瞭である。而も價格總和は商品單位、即ち他の言葉を以つてすれば商品の平均價格は從つて同時にこれに對して支出された貨幣量に等しく、取扱はれたる商品量に依つて除されたる貨幣額に等しい。この命題は價格定義への純粹な同語反覆タクトロギに外ならない。以上のことから極めて簡単な演繹に依つて貨幣の取引は他の事情にして等しければ (ceteris paribus) 與へられたる貨幣量に依存するが故に、價格は——同じく他の事情さへ等しければ——貨幣量と並行して變化すると云ふことを生ずる。

最初只だ相互的關係、即ち價格と貨幣量との職能的關係を主張するところのこの命題は貨幣量の變化が第一義的のものと説明されるならば本來の數量學說となる。數量學說の内容はカッセルの曰ふところに依る(註六五)と現存する貨幣量は一定の支拂給付を遂行せねばならず又價格標準 (Preisniveau) はそれに適合せざるを得ないと云ふことである。この理論はこの一般的説明に於て極めて自明的な感(註六六)を興へるが——グイックゼルはそれを直ちに公理 (Axiom) と名付けて居る——而も貨

幣とは何であるか、又商品とは何であるかと云ふことに應じて極めて異つた意味を得る。

マイカンチリズム時代に於ては經濟交易は全く財貨と鑄貨との交易に重點を置いて居た。このことは特にベラクルツ (Vera Cruz) ホルトゾロ (Portobelo) の歳メッセの市メッセに著しく現はれて居た。そこでは殆んど歐羅巴諸國の銀を生産する諸國、即ち南北アメリカ及中部アメリカとの間の殆んど全體の交換取引が行はれて居た。從つて此處で銀生産者と商品販賣者とが直接に相會した。故に歳の市に齎らされたる一つの與へられたる貨幣量、即ち販賣者に依つて得られたる貴金屬の量であつた。總ての商品は販賣され、そして總ての貴金屬は支出されるが故に、その時々(註六七)の價格は需要者の手に存在する貴金屬の偶然的なる量を標準として決定される。おなじく歐羅巴に於ても亦貴金屬は價格を左右する交換手段であつた。從つて人々はボディヌス (Bodinus) が——一五六八年に——價格騰貴の『優越的な且殆んど唯一の根據』として金銀の量を示したる時、またダバンザチ (Davanzati) が——一五八八年に——世界中の總ての金、銀、銅は人間の協定に依つて地球上の一切の財貨に

均しいと云ふ命題を提出した時、またロックが——一六九一年に一方に商品をのせ他の一方に貨幣をのせたる二つの平衡を得たる天秤の皿の圖を利用して居る時このことを理解することができる。

マーカンチリズムの見解の特性である數量學說のこの形式は商品世界に對する貨幣の數量關係より價格を説明せんとする最初の研究を提出して居る。素朴な心理學に對して貴金屬は常に變化なき絶對的な價值を有するが故にポデイスは騰貴を金、銀の過剰に依つて惹起されるとする彼れの命題を、この事實は『從來認められなかつた』と云ふことを強調することに依り、重要な新らしき認識と説明して居ることを吾々は了解するのである。その時まで支配したる高利(Wehner)獨占の妨害(Monopolwesen)投機(Spekulation)奢侈(Luxus)及買占(Fürkauf)が價格騰貴の原因であると云ふことであつた。^(註六八) 新たな見解に最初與へられたる説明は勿論第一の試みとしてのみ明瞭である。

價格と貨幣量の内的關係の探求に於て總ての數量でなくして單に交易に現はれる數量のみが價格構成に對して意味を有すると云ふ制限に到達せねばならな

かつた。すでにロックの場合に於て彼れの天秤の比喩あるに拘らずその様な見解への萌芽があつた。彼れは次の如く説明して居る『貨幣の數量と産業生活の範圍の間に、ある重要な關係が存在せねばならぬ。然れ共如何なる關係が存するかは決定は困難である。なんとすればそれは單に貨幣の數量に依存するのみならず貨幣の流通速度に依存する。同一なるシリングが一方に於ては二十日に二十人の人々の支拂に使用され、他方に於ては同一の手に百日間止まる』と。

ヒュームは——一七五二年に——尙ほ一層鋭く説明した、即ち『價格は或國民に存する商品と貨幣との絶對量に依存しないで寧ろ市場に齎され或は齎らすことを得る商品の量と流通する貨幣量に依存する。もし鑄貨が箱の中に密閉されるならば、それは價格に關しては恰かも貨幣を廢したと同一である。そうして倉庫及貯藏家屋の中に商品が保存されるならば商品は價格に對して殆んど何等の影響をも與へない。この場合に於ては貨幣と商品とは決して一致しないが故にその兩者は又相互に影響しないものである』と。

従つてヒュームは、貨幣増加又は貨幣減少は、それが勞働及商品に對する需要の

増加又は減少を呼び起すならば或はその限りに於てのみ價格に影響を及ぼすと云ふことを指摘して居る。吾々は嘗て觀た如くにヒュームが貨幣にある本來の内の價值を認めず、或ひは『貨幣は商品と勞働の代表者以外のなにものでもなく又單にこれ等を評價し且つ比較する手段たるに過ぎないと云ふことは明らかである』と云つて居るところのこの考へに對應して居る。——これと同じ様な思想は——一七五七年に——ジョセフ・ハリス (Joseph Harris) が展開した。

内的貨幣價值の概念は數量學說そのものより縁遠いものである。この概念は技術的構造に依つてのみ數量學說と結ばれる。而も常にただ内的貨幣價值の原理は數量學說の原理に從屬されたに過ぎない。生産費學說は例へば貴金屬生産を貨幣増加の源泉と看做し、而して更に貨幣量に依存せしめることに依り數量學說に織り込まれることを得る。

職能價值學說は需要、供給の命題の應用に於ける變更に依つて數量學說に轉換される。

従つて吾々が次に述べる金屬論者の數量學說に於て説明するならば、この表現

は『木製の鐵』と類似性を有する。然れどもこの表現は正當にリカルドに並に彼れの後繼者の理論的雜種研究に反映されてゐる。

(註六五) Cassel : Theoretische Sozialökonomie, S. 398.

(註六六) Wicksell : Vorlesungen über Nationalökonomie, 2. Bd., S. 163.

(註六七) Sombart : Der moderne Kapitalismus, Bd. 1, S. 547.

(註六八) Wiebe : Zur Geschichte der Preisrevolution im 16. und 17. Jahrhundert, 1907.

第五節 金屬論者の數量學說と通貨學派 (Currency-Schule)

アダム・スミスは確かに數量學說を退けて居た。彼れに依れば貴金屬價值及貨幣價值を支配するのは全く生産費である。兌換紙幣(銀行券)が現はれるならばそれは何等價值に影響を與へない。なんとなれば單に同量の鑄造貨幣を交易より追ひ出すからである。併し乍ら不換紙幣『もとより即時支拂の困難又は不確實の存することは、大であるか少であるかに従つて、又は兌換の時期が近いか遠いかに従つて多かれ尠なかれ金銀の價值以下に低落するであらう。(第二卷第二章)』

これと全く異つてリカルドは商品學說より數量學說への道を押し進まんとした。^(註六九) 彼れの貨幣學說は雜種產物として不統一であり且つ不調和である。かくて彼れは一方に於て結局生産費說は貴金屬及貨幣の價值にとつて決定的であると鋭く強調するが、しかも他方に於て明白にヒュームの貨幣說に結ばれて居る數量學說を奉じて居る。彼れに従へば商品貯藏の變化せざる限り價格を決定するところのものは貨幣量である。しかし貴金屬貨幣にとつては商品と同様に國から國へと自由移動性を有するが故に、只だ一國の貨幣量は終局的なる價格水準を決定するものではない。商品と貨幣の自由移動の結果總ての地方間の價格不同を平均する傾向が行はれる、それは次の法則に依つて行はれる。即ち一國に於ける貨幣量が増加し、又は減少し従つて或は貨幣價值が低落し又は騰貴するならばその他の國々に於て同様な貨幣増加が起らない場合、貨幣が外國に流出し若しくは外國から流入し或はそれと換へて商品が輸出され又は輸入され、遂に價格狀態の完全な平均が現はれるに至るのであると云ふ法則である。

若しも一國に於て貴金屬の代りに不換紙幣が流入せられるならば、然る時は最

早國際的なる價格平均の可能は存せず、そしてこの紙幣の價值はまつたく數量性に依存する。即ち紙幣量が増加し若しくは減少することに應じて貴金屬價格、商品價格、並に外國爲替相場は騰貴し又は低落する。自からの紙幣を最早兌換する義務を負はない銀行は、その銀行券の流通を任意に擴張し、又收縮することができる。そして其結果は勝手に爲替相場並に商品價格に影響を及ぼすことができる。

リカルドの貨幣理論的見解は大體一八一〇年の著名なる地金の報告(Bullion Report) (ホーナー(Horner) ソーントン(Thornton) 及ハスキソン(Huskisson) に依りて手を加へられたるもの) に於てその特徴は受け取られて居る。其後この見解は銀行券流通の理論にまで發展し、所謂通貨學說(Currency-Theorie) にまで發展した、それは主としてザムエル・ジョン・ロイド(Samuel Jones Loyd、後のロイド卿) 及その他ノルマン(Normann) トーレンス(Torrens) 及マカロック(M'ulloch) 等に依つて完成された。更にこの見解は一八四四年の有名なるピール條例に導かれた。生産費に依つて決定される内的貨幣價值の觀念を有効に確保することに就てリカルド並に彼れの門人は適當だと考へたのみならず、又紙幣の獨立なる價格の可能性をも拒否しな

ければならなかつた。がしかし事實はそうはいかなかつた。なんとすればこのことは瞭かに通貨學派 (Currency-Schule) の建設者が多く事實上矛盾を感じたであらうところの實際家であつたからである。従つて彼等は紙幣の價値の基礎付けにとつて生産費學説を看過した。そのことにはある程度まで尤もな事である。なんとすれば生産費は實に需要及供給の機構を越へてのみ一般に効果を有せしめられるからである。しかし全く貴金屬は本來貨幣であつて、而も金屬貨幣流通の『自然法則』が正しく維持される限りに於て貴金屬は損失なく、いな實に經濟的の利益を以つて紙幣に依つて代置されると説明する。しかし乍らそれは金屬貨幣流通に於ける云はゞ確固たる核心を、言ひ換へれば國際的支拂に對しては元々問題とならない一國の金屬量を紙幣に依つて置き代へることに依り達成することが出來ると信ぜられた。また貨幣數量に依るところの價格影響に關しリカルド¹が不換紙幣に就て提出したる命題の一般化の下に於て人々は銀行管理の適意に於て行はれたる兌換券の増加も亦價格構成を攪亂しなければならぬと云ふことを信じた。かゝる考慮よりピールの銀行條例に保證準備なき銀行券の金額決

定がさだめられた。しかしこの額以上には銀行券は單に金屬の納入に對してのみ發行することを許された。これを以て交易と價格構成との『自然的法則』が完全に効果すると云ふことに到達することが期待された。『自然的貨幣制度が拋棄され、その代りに紙幣の發行が見計ひに依つて行はれるならばかゝる見計ひを正確に行ふことに就て規則を與へられ得ると云ふ期待は無駄である』と。

(註六九) S. oben Kap. 8. 3.

第六節 銀行學派

尙五十年代及六十年代に於てはファウヘル (J. Faucher) プリンス・スミス (Prince Smith) クニース (Knies) 等に依つて代表されたる通貨學説 (Currency-Theorie) はその重要な敵手を所謂銀行學派 (Banking-Schule) に見出した。その指導者は價格論で名高い著者トーマス・トック (Thomas Tooke) にして彼れは貨幣學 (Geldwissenschaft) の頭目と呼ばれるジョン・スチアート・ミルに劣らぬ學者であつた。^(註七〇) トックは包括的歸納的なる論證の基礎の上に次の結論に到達した。^(註七一)

- 一、國から國への貴金屬輸送は貨幣流通及價格に影響を及ぼすまでもない。
 - 二、通貨説は他の信用要具が銀行券と同様なる役目を遂行するにも拘らず銀行券流通のみを問題にする。
 - 三、銀行は金利率又は信用授與に依つて影響を及ぼすか否かに拘らず銀行券の流通を任意に増大し又は減少し、そしてそれに依つて爲替相場に影響を及ぼすことは發券銀行の方では如何ともすることはできない。なんとすれば交易はそれが最早銀行券を必要としないに至るならば貸付の方法(Darlehenswege)に依つて交易に流出せしめられたる銀行券を復歸せしめる。
 - 四、價格は貨幣量に關係なく反對に流通手段の總額は價格狀態の結果である。
 - 五、貨幣が所得を構成する限りに於てのみ他方に於て生産費が供給を限定する如く、貨幣は需要と所得とを限定する。
- 従つてトツクは價格變動は信用の方法に依つて流通に現はれたる貨幣量の變動に依存すると云ふことを駁論する。故に彼れは今日吾々のいふ如き『信用膨脹』(Kreditinflation)の可能性を否認する。

更に進んで彼れは數量學説が一八四八年に於けるアウストラリエン及カリホルニアの金鑛發見の後送還される貴金屬増加に應用されたる限りに於てニウマルク(Newmark)と協同して數量學説を排撃せんと試みた。彼れは一八五一年と一八五七年を比較することに依つて『總ての重要な價格變動は需要供給の關係に依つて説明され得る』と云ふ結論に到達した。然れども彼れは終局に於て金産出國に於ける輸出の増加に依つて平均所得が増加され又それに依つて需要の増加が発生し、その結果として價格騰貴を招來すると云ふことを認めなければならぬ。

(註七〇) Wagner: Geld- und Kredittheorie der Pöfischen Bankakte, 1862.

(註七一) Tooke und Newmark: Geschichte und Bestimmung der Preise, Bd. 2, S. 621.

第七節 數量學説の新發展

數量學説は一方に於て銀行説(Banking-Prinzip)に同意するけれ共、他方に於ては貨幣量を決定的ならしむるところのジョン・スチアート・ミルに依つて一つの新たな

る定形を得た。——カール・マルクスが辛辣なる言葉で喚起したる矛盾をジョン・スチアート・ミルは完成した。それは彼れの父のジェームス・ミルと而も友人同志のリカルドの見解であると同時に、それに全く對立する、即ちトツクの見解である。^(註七二) ジョン・スチアート・ミルも亦次の如く説明する。『貨幣は商品であつて、そして其價値は他の商品と同様に、一時需要と供給とに依つて決定され、永きに亘つて見るならば又は平均的には生産費に依つて決定される。一言にして盡せば貨幣の供給は當時流通して居る貨幣である』と。

併し乍ら供給は更に——その點に從來の數量學說の重要な擴大が存する——貨幣として使用される信用要具に依つて増加される。なんとすれば信用はミルに従へば貨幣と同様な購買力を有する。『更に貨幣に對する需要は販賣に提供されたる總ての財貨の中に存在する……市場に於ける財貨の總體は貨幣に對する需要を構成するが故に貨幣の總體は財貨に對する需要を構成する。貨幣と商品とは相互に交換されるために相互に求め合ふ。彼等貨幣と商品は相互に貯藏と需要とである。吾々はこの現象の標識に於て財貨に對する貯藏及需要に就て論

ずるか或は貨幣に對する貯藏及需要に就て論ずるかの如何は問題ではない。』從つて商品量並に取引行為の變動しない場合、貨幣價値は貨幣數量に逆比例し、流通速度と名付けられるところのものを乗じたる貨幣の數量に逆比例する。『そして流通して居る貨幣量は流通速度を現はす數字に依つて除したる總ての販賣財貨の貨幣價値に等しい。^(註七三)

しかしジョン・スチアート・ミルが流通速度と云ふのは『一定時に於て各貨幣箇片に依つて行はれる購買數ではない。』一定時に於て同一なる貨幣が、手より手に幾度渡るかと云ふことは重點ではなく、寧ろ一定の取引量を取扱ふために幾度所有者を變へるかと云ふことが重要な點である。故にジョン・スチアート・ミルは流通速度の概念を『貨幣作用』(Geldleistung)の概念に依つて置き代へ得ると考へて居る。もとよりその結果彼れの數量學說はつまらない同語反覆に終つて居る。なんとすれば彼れの數量學說は全體の支拂給付は貨幣量に平均的貨幣作用を乗じたものに等しいと云ふに過ぎないからである。^(註七四) 『財貨が百萬スターリング(英貨)の價値にて賣却される間に、もし各貨幣が平均十度手より手に渡るならば、このた

めに必要なる貨幣量が十萬磅の總額となることは明白であつて又反對に、もし流通貨幣が十萬磅の總計であり、又各貨幣が財貨の購買に當つて一ヶ月十度手より手に渡るとするならば貨幣に對する財貨の一ヶ月の販賣は平均百萬磅と云ふ總額とならねばならぬ。』

十九世紀の後半に於ては數量論者とその反對論者との間に争ひがかはされた。就中貴金屬増加の影響に關する論争に於て及復本位に關する論争に於て然りである。貨幣量は價格構成にとつて決定的であらねばならぬと云ふ觀念が再び現はれた。そして遂に數量學説は稍一般的にアドルフ・ワグナーがそれに與へた形態に於て承認されて居る、即ち曰はく『貨幣量そして實に總體の貨幣基金の中、事實購買及勞務支出に使用されたる量並にこの量の變動は貨幣價值及其その變動にとつて決定的である……但し總ての他の事情にして變化しないならば或は變化しない限り、從つて“*ceteris paribus*”^(註七五)、然れども人々はこの“*ceteris paribus*”を研究するならば、普通に數量學説よりは、結局なものこらないと云ふ程、強い結論に達したのである。

金屬論が行はれる限り數量學説は學問上完全な公民權を贏ち得ることは不可能である。なんとなれば獨立なる內的貨幣價值の觀念は常に數量學説的思想の不俱載天の仇にして、もとよりそれは實に貨幣を單なる指圖證として又はそれ自身決して具體的内容を有しないところの抽象的財産權と觀るに過ぎない象徴論的・名目論的貨幣見解の一面に外ならないものである。

總て金屬論的な思想界からは再三、より多く統計的な、またより多く根本的な二重の數量學説に關する批評が生ずる。

次に金屬論は本能的に前世紀中葉以後の價格騰貴を貴金屬増加に歸することに關して防禦した金屬論は、その場合貴金屬の莫大なる世界貯藏に對してこれが増加は僅少であり又人口増加並に擴張したる貨幣經濟の結果常により強度に形成されたる交易の需要増加に對しても僅少であると云ふことを指摘して居る。實際現はれたる價格騰貴を人々は他の方法で、即ち商品側に存する契機に依つて説明せんと試みる。

貴金屬生産が商品價格に影響を及ぼすであらうとの假定に強く反對する議論

は利率も亦價格と同時に騰貴すると云ふ點に求められると信ぜられた。かくて一つの強い反對論が発見されなければならぬと考へられ、而して貨幣増加はそれが同時に利率を高からしめるならば價格をも高からしめるであらうと云ふことは如何にして可能なりやと云ふ事が問題にされた。貨幣供給の増加は貸付利率を低下せしめねばならぬが故に、これが騰貴する限りは貨幣過剰を存せしめることはできない。

純然たる貨幣供給並に純然たる貨幣需要の煩瑣的な概念を如何なる欺瞞的推論に誘導するかに關しては此處以上に明瞭に説明し得る場所は何處にも存しない。貨幣の提供と要求とは一二九頁(原書)に説明されたと同様に夫自體は只貨幣市場の關係事項であるに過ぎない。商品市場に夫を移譲する事は意義を存しない然れ共もとより一般に一定の貨幣増加或は實に貴金屬増加は商品價格に何等の影響を及ぼさなかつたと云ふ證明は數量學說に對する反證ではない。従つてより一層根本的なる否定は實に數量論的方程式の個々の要素を鋭い批評に従はしめることに依つて試みられた。

就中『貨幣の流通速度』を理解することの可能性が疑はれた。ヒルデブラントは——一八八三年に——次の如くに曰つた。『吾々は未だこの方程式を實際的に實現せしめる程の状態には立ち至つて居ない。なんと成れば總ての代數式あるに拘らず而も貨幣の流通速度は全く測り難き數量であるから』と。^(註七六)而してゼボンスも『問題の研究により詳細に這入るために何等かの手段又は方法を見出すこと』は不可能なことだと説いて居る。^(註七七)

併し乍ら流通速度の計算的の理解が數量理論的の法式を現實に寫さんとする試みに於て打ち勝ち得ない困難を與へるのみならず、解決に困難なる問題は既に貨幣數量と商品販賣數の概念の中に存在したのである。總じて貨幣とは何であつたか? 例へば充分なる價值を有する貨幣(鑄貨)の外に、其他の貨幣種類をも、即ち補助貨幣若しくは銀行券をも加算すべきか、又信用の方法に依る支拂、即ち振替轉付(Giroüberweisung)相殺取引(Verrechnungverkehr)手形流通(Wechselmlauf)等を法式の中に如何にして導入すべきか? 成程ジョン・スチアート・ミルは信用要具をもこれに加算した。併し乍らこのことは金屬論的立場からなし得ることであるか?

幾多の人が利用せんとした方法に依れば信用の助けに依る支拂を『貨幣利用の強度』(Intensität der Geldausnutzung)^(註七八)なる概念に轉ぜられたる流通速度の概念に收めたが、もとよりそれに依つて何等獲る處はなかつた。寧ろ反對にそれに依つて眞の概念の怪物を創造したのであつた。

人々は又商品賣上高を確めんとしたけれ共同様なる困難に落入つてしまつた。總ての財貨はその中に導入さるべきであつたか、或は生産財を背後にかくす享樂財のみが導入さるべきであつたか？ 又は財貨の外に給付を貨幣に對立せしむべきであつたか？ 而して全體の證券取引の如き他の賣買は除外することを得たか或はそれを考慮しなければならなかつたか？ 併し就中之等種類を異にするものを加算することが如何に可能であつたか？ しかもその答は常に價格に依つてのみと云ふことであつた。なんとなれば一財貨と他の財貨との合計にとつてさへ其他には適當なる公分母はないからである。併し乍らそれ自體として價格を撰ぶならば數量理論は循環論法をつくる。なぜなら實に價格とその變動を説明することが其課題であつたからである。

かくて數量學説は科學的不結果となり終る如くであつた、蓋しその方程式の一項をさへより正確に決定することに成功しなかつたであらう。従つて其認識價値は本來極めて古く、すでにボデーヌス(Bodinuss)の提出したる處の貨幣數量の増減は、それに對應して價格水準の變動を喚起すとの命題の内容以上に出でなかつた。併し數量學説はこの一般的形態に於てすら争はれたところである。殊にトツクに依つてすでに觀察されたるところの弾力性に富む銀行券流通(Totenunlauf)の行はれる場合には價格騰貴は銀行券増加に影響を及ぼさず寧ろ反對に銀行券の數量は價格騰貴に適合するとの事實が再三指摘された。數量學説に反對する強い反證はこれではなかつた。なんとなればかゝる反證は一般に數量理論の方程式の個々の要素が具體的數字で説明されない限り又商品の取引と貨幣量を如何に限定するかを嘗て知らなかつた限り與へられることができなかつた。

貨幣の概念がその金屬主義的核心から解放された時又名目主義が一切の貨幣種類は價格理論的觀察にとつて原則として同等であると説く場合に初めて大いに明瞭となつた。茲にジョン・ステアート・ミルが既に述べたところの、信用は貨

幣と同じく購買力を持つと云ふ思想は貨幣理論上正當とされたのである。貨幣(鑄貨は銀行券(Banknoten)と帳簿上の計算(Girogut haben)とを加へ、かくして貨幣量の概念にある實際上利用し得る内容を與へることが可能となつた。

殊にアメリカの經濟學者その急先鋒たるケンメラ(Kemmerer)並にアービング・フィシャー(Irving Fisher)は數字的な説明に依つて數量學說に新生命を與へ得らるると考へた。アービング・フィシャーはそれに次の式を與へて居る。(註七九)

$$GU + GU' = PH$$

茲にGは一年の間流通する貨幣の平均額。

D 流通速度、換言すれば財貨と交換される貨幣取引の平均率。

G 流通に使用される銀行預金。

D' その(G)の平均流通速度。

H 取引量即ち貨幣に依つて購買される商品の總體(財貨、勞働給付、有價證券等)。

P 總ての價格の指數的平均。

金利と物價との關係に於てクヌット・ウィクセル(Knut Wicksell)に依つて展開されたる理論を利用することに因りアービング・フィシャーは、如何にこの『交易方程式』は貨幣量が變化するや否や再三更新して現はれる傾向を有するか、と云ふことを示して居る。例へば貨幣量が増加するならば價格は騰貴し、利率は増加する。併し利率は價格より増加することが尠いが故に、このことが信用の請求に企業家を勵め預金流通は貨幣に比例して増加し價格は更に騰貴する。これと同時に貨幣量並に銀行預金の流通速度は増進し企業者活動の増進の結果取引される商品量をも増加する。又利率が價格水準を越へるや否や反對の運動が現はれる。従つて企業の制限並に價格の低下を生じ、遂に利子と價格は相互に一致するに至り、そして取引方程式が再び回復される。

數量學說を吟味するために開始された統計的研究は一九〇九年に合衆國に於て次の說に到達した。即ち實際に於て流通して居る貨幣は1.6ミリアルデンにして即ち一人當り1.6ドルを算した。貨幣の流通速度は2.7であつた。又預金通貨は6.7ミリアルデン即ち一人當り6.7ドルの計算となつて居る。その流通速度は3.7で

あつた。貨幣の總流通(C)は年當り34ミリアルデンとなつて居り又預金の流通は(C)353ミリアルデンとなり、従つて取引の總體($C \times V$)は387ミリアルデンとなる、そして唯々ミリアルデンの年輸出輸入に對して一日當り1ミリアルデン以上と云ふことであつた。

一八九六年以來價格は略三分の二騰貴した、この事は取引量の倍加せるに拘らず且つ

一、貨幣の倍加

二、預金の三倍及び

三、流通速度の容易なる増加の結果生じたのである。

この結果は次の方法に依つて得られたのである、即ち統計的に直ちに理解される手形取引よりその基礎になつて居る預金額(M)を以つて割る事に依り、この預金の流通速度(V)が明らかにされたのである。貨幣箇片(C)の流通速度(V)は銀行の場合に於て現金收支の統計を基礎として算定されたる價格變動を確定する爲めには異なる方法で評價した指數が導入された。取引量(T)の變動は外國貿易運送

業有價證券取引等を考慮する處の極めて正確に造られたる指數方法を利用し確定される。この貧弱なる代數學的或は言葉の上のみの定義から數量學說を數字の生きたる世界に移す事のこの試みは當然受くべき承認を長い間受けなかつた如くである。而も常にこの試みはかかる方面に於ける研究が尙ほ極めて種々なる可能性を暗示する如くである。

(註七一) K. Wicksell: Vorlesungen, 2. Bd, S. 198.

(註七二) Principles: Buch 3, Kap. 8.

(註七三) Cassel: Theorie der Sozialökonomie, S. 398.

(註七四) Wagner: Sozialökonomische Theorie, S. 211.

(註七五) Hildebrand: Theorie des Geldes, 1883, S. 42.

(註七六) Jevons: Money and the Mechanism of Exchange, 1884.

(註七八) Helfferich: Das Geld, 2. Aufl., S. 482 ff.

(註七九) Irving Fisher: Die Kaufkraft des Geldes, 1911.

第九章 價格均衡理論

第一節 數量理論より均衡理論への推移

數量理論は原理そのものに於ては多くの金屬論者より認められて居るが、併しその實現は以前から大なる困難に逢著したと云ふことを吾々は觀た。その困難たるや數量理論の方程式の各項を明瞭に而も更に數學的に了解すべき問題よりするものである。かくて漸次に數量理論に現はれたる均衡の思想を確保しなければならぬか、經濟的均衡をそれが數量理論の簿記に於て普通であるよりも異なる項目から造らなければならぬと云ふこととの思想が發達されなければならなかつた。特に著しく貨幣量及流通速度の銀行技術的概念が必要であるかどうか又それがより包括的な國民經濟的内容を有する諸範疇に依つてよりよく代置し得ないであらうかどうかと云ふことが疑はしくなり始めた。

余がこの意義に於て改造されたる數量理論を如何に示すかと云ふ價格の均衡理論の樹立への決定的なる第一歩は貨幣量と貨幣の流通速度の、從來争はれた概

念を先づ排除し、そうしてその代りに價格決定根據として他のものを、即ち所得を導入する場合に生じたのである。各經濟主體の貨幣所得は全く一義なる概念にして統計的に明瞭に把握し得る量である。それは事實に於て貨幣量並に貨幣の流通速度の一種の綜合を示す。それは例令迂路ではあつても市場に効果を及ぼす貨幣額を認識せしめる。なんとなれば所得は一定の期間に於て消費經濟に流入する貨幣額の總體に外ならないからである。それは營利經濟の貨幣收支に對して如何なる關係にあるかと云ふことは更に説明するであらう。

もとより既に從來所得は時として價格決定根據と名付けて來た。例へばジェームス・スチアートが穀物價格は労働者の所得關係に依つて決定されると説明して居る場合の如きである。^(註八〇)而してトックは貨幣が所得を形成する限りに於てのみ需要を決定すると力説して居る。シュモラーは彼れの原論に於て所得統計をそのまゝ價格論に引入れ、需要の變動を明かにせんとした。彼れはこれを以て決定根據としての所得を價格論に實際的に導入したが、もとよりそれを理論的に表現するには至らなかつた。價格論に於て所得を考慮することの素地はカッセル

の價格要論^(註八一)なる論文に於て現はれて居る。又價格決定根據としての所得を説明する最初の組織的研究はツキデネック (Zwiedineck) の『貨幣價值決定根據としての所得形成』^(註八二)に關する論文に於て又ウィザーの『貨幣價值と其變動に就て』^(註八三)と云ふ論述に含まれて居る。近頃はリーフマンも價格と所得の關係を強調して居る。

尤も最近に於ては全く均衡論の根本思想はシユムペターの——一九一八年に——發表せられたる『社會生産と計算貨幣』なる意味深長なる論文の中に展開されたる『貨幣理論の基礎方程式』が加へられた。それは次に説明し、且つ第二卷に於て詳細に説明し、就中本質的なる點に於て既に所得概念の限定に依つて數字的に明らかにされた國民經濟的なる均衡方程式と區別される。シユムペターは曰く『貨幣所得の概念はこの場合ファイシャーの意義に解された。従つてそれは節約された金額又は租稅給付をも含まず。之に反して消費的に使用された貸金或は資本部分も——それ故簡單に消費されたる財貨の貨幣表現として解された』と。かくてシユムペターは次の命題を提出することが出來た。即ち總ての享樂財貨の價格總額は靜止的平均狀態に於ては總ての生産財貨の價格總和に等しくなければな

らぬ。従つてこの兩者は總ての貨幣所得の總和に等しいとの命題である。併し乍らこの觀察方法に於ては吾々にとつて經濟的循環の極めて重要な部分、即ち特に資本構成と生産財貨生産との關係のある總ての現象が曖昧になる如くである。何れにしても次に以上とは別な道をとるであらう。

(註八〇) Zuckerkahl: Theorie des Preises, S. 150.

(註八一) Zeitschr. f. die gesunden Staatswissenschaften, 1900.

(註八二) Schmoller Jahrbuch, 1909.

(註八三) Schriften des Vereins für Sozialpolitik, Bd. 133, 1910.

第二節 經濟的均衡方程式

經濟期間に於て國民經濟的生産社會の内部に於ては一定量の効用効果が財貨又は人間の勞務給付の形態に於て生産される。この効用効果、即ちこの効用収益は——吾々が實物經濟の殘滓を除いて考へるならば——市場を経て決定される効用収益は一部分は消耗され他の一部分は——貯藏形成と生産財貨の創造とに依つて

資本化される。

効用収益は価格を目的することに依りて貨幣収益に轉化する。この貨幣収益は今や人的生産費、即ち勞賃、利子、企業家所得地代を含むの消却と物的生産費即ち原料等に對する出費、結局に於て人的生産費に解消される處の他の企業に對して價格たる出費の消却に役立つのである。

所得は通常再び支出される。この大部分は消費財貨の購買に役立つ或は直接的の人的勞務提供藝術家の提供 (künstlerische Darbietungen) 精々工業 (Reinigungsgewerbe) に役立つものである。これは消費財貨の價格に這入り込む間接的なる勞務提供 (農業勞働、運送業等) から嚴格に區別されなければならぬ。殘餘の所得は節約される。次に國庫に租税の形で移される所得部分は消費に向けられるか或は資本形成に導かれる。節約されたる所得は貨幣蓄藏の場合を除くならば通常、銀行又は取引所を経て企業家に流入することに依り生産財貨の購買に役立つ。

併し乍ら國民經濟に於て節約の量は生産財貨の生産と一致すると信ずることは誤謬であらう。かくの如き場合があり得ないと云ふことは吾々が資本増加を

生じない固定的なる國民經濟を考へるならば最も明瞭である。なんとなればかゝる場合に於てもたへず生産財貨は生産され、而も實に生産過程に於て繼續的に生ずる販賣の補充の爲に生産されるからである。従つて間斷なく新たな建物、機關車、橋梁等が古い建物並に機械部分に代置されねばならぬ。併し結局これ等は唯改修勞働たるに過ぎない。これに對する支出は全生産費の一部分を形成し、又消費財貨の價格に這入り込み、従つて終りに本來の消費支出として現はれる。國家消費の大部分の如くこの生産財も亦私經濟的支拂豫算には現はれない。

補充形成の代りに資本の新形成即ち國民經濟的資本増加を生ずる場合はこれと全く異なる。例へば若し鐵道網が擴張され又新たな地面が開拓されるならば、かくて目前に横はるものは新たな市區又は新たな産業部門の成立である。この目に見ゆる事象は家計豫算の言葉を用ふるならば節約である。如何なる程度にこの節約が貯蓄銀行預金として、株式として、質證券として、有價證券の發行業として投資される——生産財貨の新形成に如何なる程度まで一致するかは、統計的に、もとより未だ研究されては居ない。併し正常なる國民經濟に於てはこの並

行關係が存することを吾々は是認せねばならぬ。

従つて吾々の上來の觀察方法に依れば生産財貨の生産は消費支出の中に部分的に含まれ、而もそれは(生産財の生産は消費財貨の價格の中に這入り込む限りに於てである。けれ共この價格従つて消費支拂の外に節約に依つて發生したる國民經濟的資本増加が存在する。吾々はいま國民經濟的循環の敍上の説明を、ある一つの形式に擱へんとして暫く外國交易を除外すると、吾々は次の方程式を獲る。即ち

$$\text{價格} \times \text{生産されたる生産} =$$

$$\text{企業利潤を含む生産費} =$$

$$\text{所得} =$$

$$\text{支拂と節約} =$$

$$\text{消費されたる又資本化されたる生産} \times \text{價格}$$

もとより經濟交易は具體的なる觀察に對して決してかゝる一列の簡單なる方程式ではない。價格、生産費、所得及支出の關係は寧ろ葛藤と錯綜との紛糾である

今日商品に對して支拂はれる價格は、恐らく昨日の生産費を補償し、明日の新たな所得に轉化し、それは明後日の支出となる、かくて再び全く異なる商品の價格に轉化される。そこで經濟的交易は無數に重疊し錯綜せる循環の中に存在する個々の貨幣額即ち貨幣箇片の運命を辿らんとするならば總ての取引行爲の混亂せる連鎖に就ての觀念を得る。即ち只僅かに想像を働かしさへすれば吾々はこの方面より經濟の Aria Adone 姫の案内の糸をたぐることを意識するであらうか、その救ひは望みのないことであらう。タイン(Tain)に依つて企てられたる『貨幣の循環に關する彼れの慧眼な書物の如く透徹せる研究ですら、實にアービング・フィッシャーの大著述ですら貨幣流通そのものがあまりにも前面に現はれて居ると云ふことに苦しんで居る。

只だ個々の取引行爲がその連鎖から解放され又ある概念的なる方式に従つて整へられ且つ要約されると云ふことに依つてのみ流通の關係を明瞭に認識される。併し乍ら方程式の上述の連鎖は只一定の前提下に於てのみ實際的に應用される。一つの前提が經濟期間の概念の中に含まれて居る。嚴格に云へば勿論吾

々は次の如く云ひ得るのみである。一定の經濟期間に於ける貨幣額の總計はそれに対応する經濟期間に於ける收入若くは支出の總計に等しい。併しこの期間は前の期間と一致せずして寧ろそれに續き且より短かく或はより長くあり得る。だが若し吾々が景氣變動の原因に對する問題に立ち入ることをしないならば、正常の時に於て殆んどそうであるが、異つた期間は同じ長さであると云ふことを假定することが出来る。吾々の交易方程式の實際的の適用に對する最も重要な前提は、意味上私經濟から國民經濟に移さんとするところの複式簿記の重要原理の嚴格なる遵奉であつて、即ち他の計算に於ける記入を一つの計算への各記入に対応せしめる原理であつて、この目的のためには『不能計算』(notes konto)なるものを整へなければならぬ場合である。

吾々は特に借方収益と名付けんとする國民所得なる借方勘定を設ける、それは通常支出と節約の總體と一致する。吾々は貸方収益なる計算をそれに對立せしめる。それは價格を乗じたる効用収益を意味するのである。吾々が所得を借方の項目として説明することは複式簿記規則に従ふことになる。これに従へば企

業利潤は貸借對照表の借方の部に記入されねばならぬ。これに反して總ての商品在高は貸方側に屬する。

今吾々は借方側に於ける各記入が貸方の部の記入を生ぜしめなければならず又逆のこともなければならぬ、と云ふことを要求するならば、このことは各所得に収益を對立せしめねばならぬ事を意味する。尤も又それは普通の用語で當該所得を生産に對する反對給付と解しない場合である。取引行爲を生産的と看做すべきかどうか、と云ふ古い論争は一般に知られたる如く既に肯定的であつて、それ以上論争することは無駄なことである。吾々の觀察にとつて自づから了解されることは取引活動は効用収益に數へ込まれると云ふことである。なんとすればその收入は國民所得の一部分を構成するから。併し乍ら吾々は役人、自由職業、藝術家、教師及僕婢等の勞働もこれに數へ込まれることが自づから了解される。なんとすれば——通常統計に依ると——彼等の收入は國民所得に計上されて居るから。

尤も實物經濟的總収益が現在に於ても亦尙重大なる役割を演ずるに拘らず看

過される限りに於てはかゝる方法は一つの缺陷を示すものである。例へばこの方法が實物經濟的なる所得を消費經濟に供給する處の家政婦の活動を看過せしめる。蓋しこの所得は家政婦の活動が市場を超越することを得ないが故にのみ現はれないのである。この場合まづ純粹に形式的なる觀察原理が問題となるに拘らず而もそれは一連の國民經濟的問題を直ちに解決するのである。特に個々の勞働給付並に職業の生産性に關する論争は、國民經濟に於ては分業が合目的なる方法で遂行されるや否やと云ふ問題に歸せしめられる。かく考へるならば重農論者に依つて立ち入つて深く説明されたこの問題は事情に依つては又農業に對しても振り向けられるだらう。蓋し農業的な活動に廣い餘地を與へる國民經濟の場合が考へられるが、それはマーカンチリズムの時代に明かに存在して居たところのものである。吾々の原理を適用する場合には派生的所得と本源的所得との通常の區別が不適當であることが明かである。その一般的區別なるものは欲望満足が同じく純然たる勞務に依つて齎らすことを得又は繼續的に物財が勞務に依つて補はれ、そして又進歩的な機械設備の採用の示す如く逆なる場合もある。

る如く生産の概念を物財供給に限定する點に基づくのである。従つて吾々は派生的所得の概念を専ら勞務より生ぜざる如き収入に限定するであらう。併し乍ら所謂人的勞務は吾々が曩に直接所得として示すことのできる所得を目的として居る。なんとなればかゝる場合収益價格及所得は一致するからである。併しこの一致なるものは經濟的には不適當なる事實である。然らずんば例へば自から工場に於て働き且その俸給は企業が生産費に加はるところの化學者は、經濟的には、彼れの専門的意見に對して報酬を求める獨立なる化學者とは異つて判斷せられなければならない。

吾々は所得を借方として解した如く又吾々は國民富をも借方と考へることが出来る。だから吾々は國富を解して全財産權となすが、それはその財産權が債務に依つて埋め合はされない限りである。かゝる財産權即ち株式と債務、擔保と債務證券、家屋所有と土地所有等に、吾々は貸方として現物の個々の財産を對立せしめる。それは即ち所謂現實的方法に依つて把握されたる總ての價値物、従つて殊に總ての商品貯藏及總ての國民經濟的技術的固定資本、土地、及外國に對する債

權である。

吾々が今所得及財産並にそれに對立する貸方を極く簡單に次の頁にある圖示に依つて與へられる圖表に要約するならば國民經濟的均衡の全影を包括せしむる。其場合財産の大きさ自體は一時點に關するが、而し所得は全經濟期間に關するるのである。(原書一五五頁譯書次頁別圖參照)

全經濟的循環の圖解

この圖解の上桁は借方を示す、それは更に所得と財産とに分たれるが、吾々はそれを借方収益と借方資本に分たれると云ひたい。下桁はそれに對して貸方収益と貸方資本とを示す。その場合吾々は借方が貸方と正確に等しい状態から出發する。

茲に導入されたる表現方法に依つて吾々は資本概念又は収益概念に關して用語上の混亂から免れようと思ふ。この場所では詳細なる説明を拋棄しなればならぬ、即ちそれは既記の如く統計的に圖解されたる第二卷に保留する。若しも多義的なる用語上の抽象より免がれ、そして具體的なる數字材料を捕へる場合に

のみ、この困難なる問題に於ける誤解を免がれることを得る。吾々の一時的目的にとつては吾々は貸方資本を土地、建築資本、備品及商品貯藏、更にこれに加ふるに外國に於ける投資などに分つと云ふ點を指摘するばかりである。

吾々は借方の部に於て常時左右し得る購買力、現金在高、並に銀行當座預金を収益財産及吾々は——後に次の説明に依つて——『自己財産』(Eigene mögen)と呼ばんとするところの財産を分つ。

ある一定の時點に國民經濟が左右する個々の財産の全體を吾々は貸方資本に算入せず、寧ろ吾々はこの時點に結ばれたる収益期間に於て市場に現はれる商品貯藏を除去する。この商品貯藏を吾々は収益の部に移す、従つて戰爭經濟の表現を使用するならば『運動在高』(Bewegungsbestand)と看做すことのできる商品貯藏のみが資本の部に止まる、即ちそれは消費に這入らず寧ろ經濟の秩序立てられたる循環に對して缺ぐべからざる最少量を示す貯藏量である。もとより統計的にはこの大きさは殆んど補足されない。吾々は借方の部に於て商品のこの運動在高に現金在高と振替殘額を對立せしむる。それは經濟期間の過程に於て支出され

なく、従つて支拂の整頓されたる循環にとつて必要なる固定的購買力の最少限を現はすところのものである。茲に吾々は通常の場合はこの二つの項が相互に一致すると云ふことを假定しようと思ふ。この二つの項が現實に一致すると云ふことの證明は、もとよりでき得ない。即ち若し一方又は他方の大きさの變化が何らかの理由に依つて生ずるならばそれに因つて價格に對して影響が起らなければならぬと云ふことのみは最初から云ひ得る。かゝる變化の結果を確定することは、これが専ら主要なる限り考察の出發點に於て安んじて價格平均を假定することができらう。

吾々の圖解の垂線の右方に於ては經濟期間の收益全體がある。その中の常に變化する部分は貯藏されて居るが、もとより個々の商品に付き、この部分は一定時點に於て如何なる大きさであるかが、勿論せいぜい計算されるであらう。併し乍ら吾々は又茲にその證明の責任を有するとは云へども支拂手段の總額、振替殘高に關する現金在高、その本質上所得に依つて買取られる如く決定されて居る商品の總額がその價值上、等しいと云ふことを假定しようと思ふ。茲にも亦吾々と

つて價值同置の假定はそれ自體不適當にして、唯二つの大きさの間の或る一定の關係から出發することが必要であるに過ぎない。その場合に吾々は大體的の價值同置の便宜を假定するに過ぎない。

かくて吾々は要するに數量理論の最も古い形式に逆戻りしたけれ共それは現に國民經濟の大なる均衡方程式に採用される事に依り實際的意味を得るのである。

第三節 所得、收益及價格

吾々はこの觀察に基づき、價格、所得並に收益の關係に就き一連の推論を提出することを得る。

一、一經濟期間の過程に於て市場に齎らされる貨幣が先行の同じ長さの期間に於けるよりもより、少ないならば價格水準が低下する。又これに反して若しより多くの貨幣が流用されるならば價格の水準は引き上げられる。併しこの大きさの如何にして成立するか？

(1) 不變なる貨幣流入の第一假定及それと同時に價格安定なるものは何れの商品市場より、確言すれば貸方収益の市場より流出したる一切の所得が貸方市場に再び流入し、而も從來と同様な、同期間に流通すると云ふことである。この假定は夫自體整頓されたる本位の關係下に於てさへ必らずしも満たされない。何となれば其時も生産より逃れ去る處の所得は再び貸方収益の購買に使用されないと云ふ事が容易に起り得る。特に次の二つの場合を考へ得る。即ち

a. 所得として流入する貨幣額は蓄藏されるか或ひは輸出される。

b. また所得は國民經濟の借方資本に、例へば證券市場に向つて流入される。然る時は所得は恐らく株式に對する購買價格として他の手に移行行き、而して更に再び他の證券の購買に役立ち得る。従つてそれは再び商品市場に利用されるに至るまで非常に長く證券市場に留まり得る。

この二つの場合の一つが廣い範圍に現はれるならば、これに依つて商品市場に於ける價格下落の傾向が生ぜねばならぬ。

(2) 併し乍ら又それと逆なことは、従つて價格安定に對する第二の假定の破壊も

貨幣

起り得る。この假定の説くところに依ると商品市場に由來する所得のみが若しも價格變動を生じないならば、再び商品市場に流入しなければならぬのである。この假定は次の場合に除かれる。即ち

a. 蓄藏され又は移出されたる貨幣額が急に再び現はれる場合。

b. 又國民經濟の借方資本より財産力を生み出したる場合。例へば吾々は證券所有に基づき貸金を借り入れ、而も實に銀行より新たに創造されたる貨幣銀行券には振替殘額の援けに依つて供給されることを假定しよう。先づこれが可能なるか否か、又は如何なる程度まで可能なるかと云ふことを暫く問題外に置く。扱て吾々は更にこの貨幣が商品市場に流入することを假定するならば、それに依つて商品價格の騰貴への傾向を生ずるであらう。最後にたとひ貸付金をも再び取り除くとも、而もそれに因つてある一定の時期に於て市場に現はれる購買力の減少を生ずる。

(3) 所得の部より均衡方程式の第三の破壊の生ずるのは購買力が無より生ぜず、従つてそれは商品市場よりも亦國民經濟の借方資本よりも流出せざる場合、即

ち上述の通貨膨脹説的所得構成の場合である。

二、吾々は次に均衡方程式の貸方の部に於ける變化に依つて生ずる價格變動を觀察しよう。主として次の場合が問題となる。即ち、

(1) 生産の増減は方法若しくは勞務の變化に依る。

(2) 現存の又は從來の經濟期間から得られたる貯藏が市場に大量的に提供され或ひはこの貯藏の増加、運動在高の増加が起る。

a. 稍々大なる一定の貯藏維持なるものは、それ自體各國民經濟にとつて必要である。それは一方に於て流入と収益とに於ける動搖の平均のためであり、他方に於ては流通行程そのものが一定の量、即ち圓管中の水に比較することのでき従つてその意味が戰爭經濟に於て著しく現はれるところの所謂運動在高を要求するが爲めである。この運動在高の大きさなるものは國民經濟の組織に係する。併し若し供給の停滯を生じないならば運動在高は決してゼロに等しくなることはあり得ない。

b. 一般に市場に現はれない効用収益は特別なる考慮を要する。なんとすれば

その生産と消費とは實物經濟の圈内に於て行はれるが故である。それはそれ自體價格に對して影響せず。従つて結局に於てまた均衡方程式に屬しないのである。若し効用収益が經濟制度に於ける變化に依つて市場に現はれるならば、他の言葉をもつてすれば、貨幣經濟の擴大が生ずるならば價格構成にとつて重要である。戰爭又は通貨膨脹の結果として實物經濟から貨幣經濟への夥多の推移を觀察しなければならぬ。先づ自己供給者の消費制限に依つて一定量の農産物が市場のために提供される。次にその勞務が一般的兵役義務に基づいて居た軍隊に代つて庸兵制度の現はれる場合がある。多くの名譽職は有給のものに變る場合がある。徒弟の勞働が屢々無給の勞働より有給の勞働に改まる場合がある。かかる要因は勞働給付を増加せしむることなしに市場に齎らされる効用収益の増加を部分的に生ぜしめる。この事は價格が従前の經濟期間の所得より支拂はれる限り又豫め實物報酬が存せざる限り商品單位當りの價格下落の傾向を生ぜしめねばならぬ。従つて特に古い所得を以て勞務のより大なる量が購はれねばならぬ。併しこの價格下落は租税の壓迫 (Steuerdruck) より成立するところのもの

同じ印象を與へる。なんとすればこの價格下落は僅少なる所得が消費に提供されること云ふことから生ずるからである。故に反動としての貨幣經濟の擴大は——租税の壓迫と同様に——價格騰貴の傾向を生ぜしめる。併しこの傾向は唯だ新たな購買力を形成することの可能である場合にのみ達成することができる。總じて吾々が説明し得る事は一方に於て一定の經濟期間に於て支出される一切の所得と、他方に於て同一なる經濟期間に於て市場に送られる財貨並に勞務なるものが價格の水準を決定すると云ふことである。この價格水準は商品市場より流出する總ての所得が——併し又この所得のみ、從つて如何なる他の購買力にもあらず——商品市場に再び流入するならば、又は他方に於て商品市場に現はれる効用収益がその數量上或はより、重要な點に就て云へば、効用効果上常態變化しないであるならば變化しないであらう。若し財貨並に貨幣の總體を効用効果の使用し得べき公分母とすることに成功しないならば、吾々は所得に對して價值單位の公分母を有すると同様に、かかる場合は簡單なる割算に依つて價格變動を計算することは直ちに出来るであらう。併しかゝる公分母は唯々個々の商品群に就て存

在するのである。就中食料品に就てはカロリーに存する。『生活資料騰貴とその法則性』^(註八四)に關する余の研究はこの事象を證明する證左を含んで居る。

著名なる算定に依れば戰前獨逸の國民所得は約四十億マルクにして、この中會計豫算の統計が示す如くんば約四十パーセントは食料に對する支出である。從つて食料支出は十六億マルクの總計となる。これに略々八十兆カロリーの食料消費が對立する、依つて千カロリー當り二ペニヒに價ひする。

一九一七年より十八年に亘る經濟年度に於ては五十億マルクの國民所得が計上された。併し乍ら戰時騰貴の結果、その中の四十パーセントのみならず國際的の比較及個々の會計豫算の考慮に於て見積り得る如く、小なくとも六十パーセント、即ち約三十億が食料品のために支拂はれたであらう。同時に使用し得べき食料品は殆ど六十五兆カロリーに對して四十六ペニヒの價格を生じた。

直接の價格觀察に依つてこの推論の結果は確證された。生活資料價格の指數の示す處に依ると一九一四年の四月から一九一八年の二月までの間に生活資料が二倍以上になつた。即ち五人頭の極めて困窮せる労働者の家族に對する戰時

分配の價格として一九一四年の四月には各千カロリに就き一七ベニヒに、一九一八年の二月には千カロリが三七ベニヒに確定されて居る。價格觀察の絶對的な數量なるものは全く推論的に計算されたる數字に達しないことは事實上の消費が戦時分配より異つて構成されたと云ふことに依つて容易に説明される。

價格構成に於ける所得の支配的な役割は多種多様に現はれる。たとへその役割は富有なる人口を有する都市又は地方は、低位なる所得階段を有する經濟領域よりも高い程度の價格水準を呈するを常とすると云ふ點に現はれる。この事は商品又は支配的な本位貨の品質と全く無關係に現はれる。紐育又はベース・アイレスがロンドン或ひはベルリンに比較して物價の高い都市であると云ふ事は部分的にこれと關係がある。大都市の内部に於ける各市區の物價高度の差異は總ての他の價格を決定する要素が茲で平均されて居る場合にこの様にのみ説明することを得る。その場合家賃の高さは勿論原因ではなくて寧ろ結果である。併し場所的な價格の區別ばかりでなく、時間的價格變動も亦屢々所得の變化に遡ぼるの外はない。購買のために使用し得べき貨幣額は必らずしも所得より流出

するを要しない。それは又財産が清算し得る限りに於て著手するに依り或は信用の請求に依つても増加せしめる事ができる。併しこれは要するに唯だ新たな貨幣の準備に依るか又貯藏されたる現金在高を解くことに依つてのみ可能である。

(註八四) ローゲマン氏「生活資料騰貴と其適法性」一九一九年、シユモラー一年鑑一二一頁以下。

第四節 價格關係

若し吾々が各々の所得は如何に支出されるかと云ふことを問題にするならば吾々は價格關係の問題に達する。なんとなれば絶對的な價格の水準が全く所得又は収益に依つて決定されるならば個々の商品價格は個々の商品の數量單位のために備へられたる所得部分に外ならないからである。この所得部分は先づ需要に關係する。經濟的財貨の世界は需要の見地に於て次の如くに分類される。

(1) その需要が上下より實際上殆ど限定されて居ない如き財貨、それは特に奢侈品が含まれて居る。

(2) その需要が下に向つては鋭く限定されて居るけれど其上に向つては然らざる財貨。かゝる一般に自由財貨に屬して居る水が指摘される。

(3) その需要が上に向つては稍々確定的なる限定を有するが、下に向つては限定されざる財貨、それには多くの食料品が含まれて居る。なんとなれば之等は著しく相互に代替し得るからである。然れ共大體に於てそれ等は次の部類に屬する。

(4) その需要の稍々鋭く上下の限界を有する如き財貨、この兩限界が著しく接近して居る生産物は鹽である。

價格變動は需要構成に依り所得と需要との關係への簡單なる演繹が示す如く一定の方法に於て影響される。若し需要が上に向つて限定されるならば消費のこの限界が既に達成されたことを前提とすると、所得の高さはそれ自體直接に影響を及ぼさない。これと反對に若し需要が下に向つて限定され又消費がこの下の限界に止まつて居るならば、所得の一般的減少は決して價格に對して直接なる

影響を與へるものではない。それに對して、若し需要が上に向つても下に向つても實際的に限定されないならば、従つて一般の所得變化は極めて強度に影響するものであつて、それは奢侈品の價格變動の場合にも容易に現はれる處のものである。

併し乍ら各々の所得は如何に支出されるかは需要構成のみでなく、寧ろこれに以て貯藏構成がそれと如何に結合されるかと云ふ方法に關係する。若し切實なる需要に對して存在する一商品に就て比較的僅かなる貯藏量が與へられるならば消費者はそれに對する支出を増加せんとし、そのために從來充足するを常としたより切實ならざる欲望を抑制することになる。従つて價格は生産費を越へて高まり得るが、それは先づ全體の價格を決定するのである。——その如何なる意義に於てであるかは後に論ずるであらう。故に需要形成は獨り價格關係にとつて決定的になる。かくて戰爭中に現はれたる處に依ると増加する缺乏と共に食料品の價格はその効用効果、即ちカロリーに依つて表現されたる營養價値に益々強く對應したのである。例へば比較的僅少なる營養成分を有するに對して元々

高價な贖の肉は極めて安價なる肉の種類となりて居たが、これに反して平時に於て營養價值單位當りより安價なる豚肉は一九一五年十月(最高價格以前であるが)に於て他の種類の肉以上に著しく高い價格を生じた。同様に脂肪並に食料バタの價格も殆ど全く相近付いた。實に平時に於て高度なる營養價值であつたに拘らず(バタに於ける七六〇カロリーに對して一〇〇グラム當り八八五著しく廉價であつた處の豚の脂肪は—その價格は伯林で僅か一八五ペニヒでありバタは一キログラムに對して二八五ペニヒの價であつた。—一九一五年の十月にはその營養價值に對してバタよりも高價となつた。豚の脂肪の價格は五マルク八ペニヒとなり、又バタの價格はキログラム當り五マルク五〇ペニヒとなつた。

ハットはバタの七六〇カロリーに對する六七七のカロリー成分に應じては遙かに廉價であつた。併し乍ら營養價值に由る『價格均衡の傾向』は全く一般的に確定されることを得た。この價格均衡の傾向は騰貴と缺乏との間の價格關係に於ける推移に就て鍵を與へる。

缺乏が生じ且所得に變化なき場合、かゝる傾向は經濟主義の支配より如何に生ずるかと云ふことは食料品騰貴に關する余の論文の次の考察が明かに示すところである。

かりに一五、〇〇〇の營養價值單位が五人を有する家族の毎日の食料需要を與へるものとせよ。この需要はその半分が馬鈴薯に依り三分の一がパンに依り十分の一が肉に依り、その他は贅澤品に依つて満たされよう、吾々は更に進んで年々食料に一、二〇〇マルクが支出され又—吾々は價格の平時の水準を取つて見ると—馬鈴薯、パン、肉及贅澤品の購買のためにそれ〴〵二〇〇、二二五、三三〇及四四五マルクが必要であると云ふ事を假定して見よう。

| | 一日當り消費 カロリー | 年の支出 マルク | 1000カロリー當り價格 ペニヒ |
|----------|----------------|-------------|---------------------|
| 馬鈴薯..... | 7500 | 200 | 7.3 |
| パン..... | 5000 | 225 | 12.3 |
| 肉..... | 1500 | 330 | 60.3 |
| 贅澤品..... | 1000 | 445 | 121.9 |
| | 15000 | 1200 | 22.2 |

先づ吾々は馬鈴薯の價格が騰貴し、そして而も七、三、二、一より八、二、一、〇へ例へば運賃騰貴の結果騰貴すると假定しよう。其結果は先づ馬鈴薯のために決定された支出費目の増加となる。茲に總支出を騰貴せしめることが不可能であると前提するならば、その結果は他の支出費目の一つがそのために節減されねばならぬ。併しそのためには勿論必要の少ない需要の充足のために決定されたる費目が考慮される。従つて贅澤品消費の制限が生ぜねばならぬ、この事がもし營養價值消費の減少を結果するならばこれに對する補充のために尙ほ常に最も廉價なる食料品の消費即ち馬鈴薯が増加される。従つてその馬鈴薯價格は更に一層騰貴される。

併しこの價格變動は限界がある。價格變動がパンの價格を越へるや否や、パンは極めて廉價なる食料品となる。従つてその價格變動は今やこの商品をも捕へなければならぬ。パンの價格變動が更に繼續されると馬鈴薯の價格變動は再び豫猶が與へられる、即ちパン價格及馬鈴薯價格は今や更に騰貴することを得るこの價格水準は肉の價格水準を越へて進むに至る。かくて與へられたる所得を

もつて營養價值の最高量を達成せんとする努力より營養價值に應ずる生産物の價格均衡への傾向を生ずる。

今若し肉の場合に價格水準の變化が始まるならば屠殺業に於て如何なる賃銀騰貴の結果を生ずるであらうか？肉の價格の騰貴は間接に贅澤品に對する支出の節減を生ずるか、恐らくは又直接に肉の消費の制限に依つて馬鈴薯消費の増加を生じ、従つて馬鈴薯價格の騰貴を生じ、それは繼續されてゆき遂に價格にまで及ぶ。

價格騰貴は從來生活資料貯藏量の減少と少しも關係するものではないと云ふ原因に依つて惹起されると考へられて居た。併しも斯くの如き場合が現はれるならば何を生ずるか、即ち生活資料の支給の困難が現はれたる場合、換言すれば食料品の缺乏が展開される場合は何が生ずるか？若し馬鈴薯の輸入が減少するならば消費者はより高い價格を承認して其需要を確保せんと試みる。この價格變動は今やそれが他の原因に依つて生ずるであらう場合に然る如き經過を生ずるであらう。馬鈴薯價格は騰貴し且次にパンの價格、最後に肉の價格の騰貴を伴

ふであらう。従つて再び生産物の價格均衡への傾向を生ずるであらう。勿論結局に於て家計は平均して馬鈴薯の消費を減じ、そのために營養價値の總消費量は減少を蒙む。併しその他の消費の増加は不可能であつた。與へられたる年所得に於て他の食料品の使用に依つて營養價値の不足を補はんとする總ての試みは唯々生活状態を困難ならしめるに過ぎないからである。

これに反して例へば肉の場合に貯藏減少が始まるならば、これはただ最初のみ肉の價格の騰貴を生ぜしめる。然れども次に肉の消費の制限及馬鈴薯に對する需要の増加、又それより後れてパンに對する需要の増加を生ずる。従つて即ちたとへ間接であつても價格均衡が惹起されるであらう。

かくて吾々は次の命題に到達する。即ち生活資料供給の如何なる範圍に於て貯藏量の減少又は價格騰貴が始まるも所得の變化がないならば經濟原則が常に作用し、より低廉なる食料品への需要が切實となり、そのために營養價値を標準とする價格均衡への傾向を生ずると云ふことである。(註八五)

吾々が若しこの命題を一般化するならば次の命題が現はれる。即ち價格は缺

乏が大なれば大なる程益々客觀的効用價値に適應すると云ふことである。被服原料又は燃料に於ける如き他の商品種類の場合に物價騰貴の時代に於て同様な價格均衡を觀察すべきや否やを研究すべきであらう。

需要が消費財貨の價格を生産費から解放し得る如く、需要は又生産財貨に對する消費財貨の價格關係に於て類似の變動を齎らすことができる。若し消費が所得額以下にあるならば、このことは私經濟的に見て節約を意味するが、國民經濟の立場より見るならばそれは通常生産財貨の購買を意味する。例へば今ある動機より消費の増加が生じたならば、これは所得の變化せざる場合に於て消費財貨の價格騰貴又は生産財貨の價格下落を齎らさねばならぬ。もとよりこのことは迂路を経て生ずるのであらう。なんとすれば節約が減少するならばこの事は先づ國民經濟の借方の部に影響を及ぼすに過ぎない。貨幣市場又は資本市場の利率は騰貴し企業家活動を困難ならしめる。そして他方に於て消費財貨の價格騰貴は直接に奢侈品の生産に投ぜられて居る生産財貨の生産を刺戟する結果を生ずるのであらう。正常の事情の下では價格は生産費と一致する。そして實に吾々が

價格を——勿論古典經濟學の學說より幾分異りたる意味ではあるが——簡單に他の方面から觀察したるところの所得として解するならば殆ど例外なくそうである。實に生産費は先づ物的費用と人的費用とに分たれる。併も終局に於て専ら人的費用に解消される、即ち貸銀、利子及利潤これである。地代 (Rent) は利子又は利潤の背後に潜むが、それが資本化される場合には利子の背後に或ひはかゝる場合の未だ生ぜざる限り利潤の背後に潜むのである。

尤も生産費と所得はそれ等が同一化し得る限り異りたる經濟期間に屬する。なんとすれば費用は一部分ある場合は商品が賣却される以前に所得を形成する貨幣支出であり、貸銀、一部分は利子、又他のある場合には費用は商品賣却後の所得に轉化する(利潤、一部分利子)。固定的なる全く平等に經過する國民經濟に於ては費用は全く所得に等しくなければならぬ。従つて價格水準が所得に依つて決定されると云ふならば、そのことはこの場合價格水準が生産費に依つて確定されると云ふ命題と同義である。景氣變動に曝されて居る處の自から變化する國民經濟に於ては勿論生産費と所得との間に強い擴張が生ずる。けれ共この事に關し

ては吾々は茲に論及せず。

吾々は今や個々の價格と生産費との間に存する關係を考察するであらう。一般に茲では古典派經濟學が説明したる關係が存在する。需要形成は任意に増加し得る商品に於ては一時的に——併し永久的ではないが——價格をして生産費以上に騰貴せしめ或ひはそれ以下に下落せしむる影響を生ずることを得る。

任意に増加し得ない財貨に於ては生産費を越へたる價格騰貴は漸次に資本化されるところの収益を形成せしめる。これに反して價格の對應的下落は生産の減少従つて費用引き下げを齎らす、それは貯藏増加と共に減少し、貯藏の減少と共に減少すると云ふ前提である。支出が如何なる程度まで増加するかと云ふことに關して決定を與へるのは需要である。この場合必要の程度に應じて勞働及資本の投下が形ち造られる。

要するに吾々は價格を財貨貯藏、財貨需要、貨幣貯藏(財産力)及貨幣需要(貨幣支出、生産費)より説明せんとする事を價格理論の課題として提出した。吾々は今やこの四つの要素が次の如く協働することを見た。即ち一般價格水準は所得に對す

る収益量の割合に依つて決定され或ひはある意味に於て同じことではあるが、生産費に對する収益量の割合に依つて決定される。詳言するならば一般物價は市場に提供される財産力とある關係に於てそれに依存する貨幣需要又は貨幣支出に對する収益量の割合に依つて決定される。この財産力の中、如何程が個々の財貨に振り當てられ従つてそれに投ぜられたる生産費は如何ほどであると云ふことは貯藏形成の目的のためにする借方資本及勞働力の投下に對して常に決定を與へる需要形成に先づ依存するのである。然れども需要形成それ自體はまた更に一定なる需要が絶對的に與へられずして寧ろまたその他の需要が提供されたる貯藏を基礎として如何に満足されるかに依つて影響される限りに於て貯藏形成に依存するのである。その場合所得の分配は長きに亘つて見るならば財貨貯藏が貨幣支出又は生産費に對應する如く個々の貯藏に振り當てられるのである。若しもそれ以上利得を生ずるならば、この利得は資本化される。かくて勞働支出は價格關係の背後に存する尺度となる。尤もその場合は利潤と利子に依つて生ずる間隙である。併しその間隙はある目的のために橋渡しされ得る。需要形成

は勞働支出に決定を與へる。併し乍らこれに對して吾々は一般に公分母を有しない。勞働支出と價格とがそれに對應すると云ふことは一つの假定(Hypothese)として残る。

それにも拘らず吾々は經濟が幾世紀にも亘る長い勞作に於て價格關係を支出と需要に適合せしめたと云ふことを公理として提出することができ。それはこの關係が亂され従つて『利害の調和的活動』(das harmonische Spiel der Interessen)が否定されると云ふことは本位制度の攪亂の最も悪い結果に屬するものである。

(註八五) ヲーゲマン氏『生活資料騰貴とその合則性』シュモラー年鑑、一九一九年一二八

頁以下參照

貨幣及價格に關する文獻

(一) 價値論及價格論の教義

- Zuckerkanndl : Zur Theorie des Preises mit besonderer Berücksichtigung der geschichtlichen Entwicklung der Lehre, 1889.
- Block : Les progrès de la science économique, 1890.
- Kaulla : Die geschichtliche Entwicklung der modernen Werththeorie, 1906.
- Diehl : Die Entwicklung der Wert- und Preistheorie im 19. Jahrhundert Festschrift für Schmoller über die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre im 19. Jahrhundert, 1908.
- Rost : Die Wert- und Preistheorie mit Berücksichtigung ihrer dogmengeschichtlichen Entwicklung, 1908.
- v. Böhm-Bawerk : Artikel Wert im Hanw. d. Staatsw, Bd. 8, 3. Aufl., 1911.

(二) 價値の概念及本質に關しては

先づ生産費學說及勞働價値學說の代表者就中アダム・スミス、リカルド、カール・マルクス等はこの中に入れられる。其他更に進んでの完成を吟味する。即ち

- H. C. Carey : Principles of political economy, 1837-40.
- Rodbertus : Zur Erkenntnis unserer staatswirtschaftlichen Zustände, 1842.
- v. Herrmann : Staatswissenschaftliche Untersuchungen, 1874.
- F. Oppenheimer : Wert und Kapitalprofil, 1916.
- 主觀價値論の最も重要な著述に屬するもの即ち
- Thomas : Theorie des Verkehrs, 1841.
- Gossen : Gesetze des menschlichen Verkehrs, 1854.
- Jevons : Theory of political economy, 1871.
- Menger : Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 1871.
- Walras : Économie politique pure, 1874.
- v. Wieser : Ursprung und Hauptgesetze des wirtschaftlichen Wertes, 1884.
- Der natürliche Wert, 1889.
- v. Böhm-Bawerk : Kapital und Kapitalzins, 2. Abt., Positive Theorie des Kapitals, 1. Bd., 3. Buch, 1888, 4. Aufl., 1921.

- Zuckerlandl: Artikel Preis im Handw. a. Staatsw, 6. Bd., 3. Aufl., 1906.
- Schumpeter: Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie, 1908.
- Engländer: Gleichförmigkeit von Preis und Nutzen. Schmollers Jahrbuch, 1920.
- Das Geld ohne Eigenwert und die Preislehre, Conrads Jahrbücher, 1922.
- Gide: Principes d'économie politique, 1884.
- Marshall: Principles of economics, 1890.
- Wicksell: Ueber Wert, Kapital und Rente nach den neueren nationalökonomischen Theorien, 1893.
- Irving Fisher: Mathematical investigations in the theory of value and price, 1892.
- J. B. Clark: Philosophy of value, 1881.
- The distribution of wealth, 1899.
- Davenport: Value and distribution, 1908.
- 價值及價格論に關する其他の著述を指示すれば、即ち
- Neumann: Zur Revision der Grundbegriffe. Ztschr. f. Staatsw., 1869 u. 1872.
- Grundbegriffe der Volkswirtschaftslehre. Schönbergs Handbuch der politischen Oekonomie, 1884.

- v. Gottl: Der Wertgedanke, ein verhilltes Dogma der Nationalökonomie, 1897.
- Dietsel: Theoretische Sozialökonomik, Bd. 1 (2. Hauptabteilung. des Wagner'schen Lehr- und Handbuchs), 1895. (Versuch einer Synthese zwischen objektiver und subjektiver Wertlehre.)
- Cassel: Grundriss einer elementaren Preislehre. Ztschr. f. d. ges. Staatsw., 1899.
- O. Spann: Theorie der Preisverschlebung. 1913.
- E. Wagenmann: Die Lebensmitteltenerung und ihre Gesetzmässigkeiten, Schmollers Jahrbuch, 1919.

(三)數量學說の教義

これに就ては貨幣の一般教義に於て支持され就中ラーフィン及ホフマンに於て

- Ad. Wagner: Die Geld- und Kredittheorie der Peelschen Bankacte, 1862.— Neuerdings abgedruckt in Pleng's Staatswissenschaftlichem Musterbuche, Bd. V. 1920.
- G. Wiebe: Zur Geschichte der Preisrevolution des 16 und 17 Jahrhunderts, 3. Abschnitt.— Staats- und Sozialw. Beiträge, 7. Bd., 2. Heft.
- H. P. Willis: History of the quantity-theory. Journal of political economy, 1896.

Scott: The quantity-theory. *Annals of the American Academy of Political and social science*, 1897.
 Spielhoff: Die Quantitätstheorie, insbesondere in ihrer Verwertbarkeit als Hausstheorie. *Festgaben für Adolf Wagner*, 1905.

Altmann: Artikel Quantitätstheorie i. *Handw. d. Staatsw.*, 6 Bd., 3. Aufl., 1910.

Kirmaier: Die Quantitätstheorie. *Abhandl. d. staatsw. Seminars Jena*: 1922.

(四)數量學說 代表者

象徴的數量學說の代表者は、重商論的著述者に關する上記の概観に従ふ。

Samuel Jones Loyd (Lord Overstone): *A Letter to J. B. Smith, Esq.*, 1840. und viele andere *Flugschriften*.

Torrens: *The principles and practical operation of Sir Robert Peel's Act of 1844*. 2. Aufl., 1857.

M'ulloch: *Treatise on metallic and paper money and banks*. *Encyclopaedia Britannica*, 8. Aufl., 1858.

—Select collection of scarce and valuable tracts.....on currency and banking. Hier findet sich auch der Bullion Report abgedruckt.

Tooke: *Considerations on the state of currency*, 2. Aufl., 1826.

Tooke and Newmarch: *History of prices, 1838-1857*. (Ins Deutsche übers. von Asher.)

J. Wilson: *Capital, currency and banking*, 1847.

J. Fullarton: *On the regulation of currencies*, 1844.

Courcelle-Seneuil: *Traité théorique et pratique des opérations de banque*, 1853.

John Stuart Mill: *Principles of political economy*, 2. Bd., 3. Buch, 24. Kapitel, 1848.

B. Prie: *Principles of Currency*, 1875.

F. A. Walker: *Money*, 1878.

— *Political economy*, 3. Aufl., 1888.

F. W. Tansig: *Money and banking*. 1895.

K. Wicksell: *Geldzins und Güterpreise*, 1898.

J. J. O. Lahn: *Der Kreislauf des Geldes*, 1903.

Th. Christen: *Die Quantitätstheorie des Geldes*, *Annalen des Deutschen Reichs*, 1916.

この他名目論的數量理論家に關する文獻の詳細は第一篇の末尾に記録した。

昭和四年十月十五日印
昭和四年十月十八日發

行 刷

著 譯 者

青 木 孝 義

發 行 者

日 本 大 學 出 版 部

右 代 表 者

高 橋 良 平

印 刷 者

山 本 禎 男

印 刷 所

宗 文 社

不 許 複 製
著 作 權 所 有

貨 幣 理 論
定 價 二 圓 四 拾 錢

發 行 所

日 本 大 學 出 版 部

發 賣 所

東 京 市 神 田 區 三 崎 町 三 丁 目 一 番 地
振 替 口 座 東 京 八 四 〇 九 番
東 京 市 牛 込 區 揚 場 町 一 四 番 地
振 替 口 座 東 京 六 七 〇 一 四 番
東 京 市 神 田 區 一 橋 通 町 五 番 地
振 替 口 座 東 京 三 七 〇 〇 番
東 京 市 日 本 橋 區 本 銀 町 三 〇 丁 目
振 替 口 座 東 京 二 八 〇 〇 番

東 京 寶 文 館
有 帝 國 書 院
東 京 寶 文 館

關 西 販 賣 所

大 阪 市 西 區 阿 波 堀 通 四 三 番 目
振 替 口 座 大 阪 四 三 番 目

會 社 株 式 大 阪 寶 文 館

關西圖書院
大洲文庫

東京
東京書院

總發行所
日本大學出版部

山本
山本



日本大學
日本大學

591
175

